ティーチング・ポートフォリオ（教育業績ファイル）

教員氏名	豊住　竜志

主な担当科目	ハーモニー演習①,ハーモニー演習②,ポリフォニー演習A（作曲・音デ,サンプロ,指揮）,ミュージックセオリー（上級）,鍵盤ソルフェージュ②,対位法,聴音・視唱ソルフェージュ②_,楽曲分析特殊講義,実技個人レッスン[作曲・エレクトロニクス実技①②④],実技グループレッスン[作曲Ⅱ①,作曲Ⅱ③]
シラバス	次ページをご参照ください

2022年の教育目標・授業に臨む姿勢	作曲レッスン（主科・副科）およびクラス授業（講義・演習）を担当している。学生の能力／資質の向上に貢献するための授業方法に様々な改善と工夫を実践することを目標とした。昨年度の各種教科書作成（他教員との共同作業）の取り組みに引き続き、本年度はハーモニー演習・ポリフォニー演習の理論系授業を受講生がより理解しやすくするための新規／補助教材の作成やTeamsを中心にICTを活用した授業運用の充実を目標とした。
2022年の教育に関する自己評価	作曲レッスン（主科・副科）に関しては、各学生が創作能力を効率よく高めることができるように、楽曲分析や音楽理論の学習指導の充実をはかった。年度当初から年度末にいたる各学生の作品制作の状況を見ると成果をあげることができたと思われる。また、担当学生による音大作曲科交流演奏会およびテアトロ・ジーリオ・ショウワ・オーケストラ第4回学内発表会への出品などの成果があった。クラス授業（講義・演習）については、上記の教育目標に記載した通りTeamsを等を活用した授業運用や音楽理論系の授業で用いる新規／補助教材の作成に取り組み、授業で実際に使用して成果が見られたと思われる。

2022年のFD活動に関する自己評価	ソルフェージュ学内組織においては新カリキュラムの運用が6年目となり、第1回研修会においては授業運用をより良くするために年間テーマに加えて、iPadを活用した授業方法の研究を行なった。また3月にはICTを活用した教育の研究会として専任教員によるソルフェージュ学内組織FD研修会を開催した。年間テーマに基づいた様々な取り組みの実践例を意見交換することにより見識を深めることができた。
授業改善のために取り入れた研修内容	ソルフェージュ学内組織FD研修会において、iPadやICTの効果的な活用法を研修した結果、より効率的に授業で取り入れ実践する方法が明確になった。その他のFD研修会の参加を通じて、教員間の意見交換からより良い指導法や授業運用を学び、自分の授業で取り入れた。

科目名－クラス名

ハーモニー演習①　G

曜日時限

火 1時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	1～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋の調性音楽において「和声進行」は一定の秩序に基づいており、作品を構成する根本原理となっています。歴史をふまえた音楽理論についての認識は、音楽を正しく理解し演奏するために欠かせないものといえるでしょう。「ハーモニー演習①」では、最も一般的な方法である４声体バス課題の演習を通して機能和声の理論を学びます。同時にキャリア形成のためのニーズに応え、コードネーム及びコード進行との関係についても解説します。これらの学修を通して、音楽を勉強する者としての専門知識、および音楽における理論的思考力を養っていきます。

学修成果

基本的な和声学の理論を習得することにより、調性音楽の原理を理解することができるようになります。楽曲分析を通じて作品を深く理解することは、読譜力を向上させることにつながります。さらには作曲・編曲や即興演奏など幅広い分野に通用する応用力を養うことができるようになります。

授業展開と内容

第1回　和声学を学ぶ意味。予備知識（楽典事項の確認）

第2回　４声体による３和音基本位置（標準配置）の概説

第3回　基本位置３和音の演習　①　共通音のある場合

第4回　基本位置３和音の演習　②　共通音のない場合

第5回　基本位置３和音の演習　③　Ⅱ-Ⅴ

第6回　基本位置３和音の演習　④　Ⅴ-Ⅵ

第7回　和音設定の原理（和音機能、終止等）

第8回　各種の調（基本位置３和音）の演習（長調）

第9回　各種の調（基本位置３和音）の演習（短調）

第10回　３和音第１転回位置の概説

第11回　３和音第１転回位置の演習　①　共通音のある場合

第12回　３和音第１転回位置の演習　②　共通音のない場合

第13回　３和音第１転回位置の演習　③　バス課題の設定と演習（長調）

第14回　３和音第１転回位置の演習　④　バス課題の設定と演習（短調）

第15回　前期のまとめと小テスト

第16回　前期小テストの解説、および前期範囲の復習

第17回　３和音第２転回位置の概説

第18回　３和音第２転回位置の演習　①　定型の確認

第19回　３和音第２転回位置の演習　②　第２型カデンツの応用

第20回　３和音第２転回位置の演習　③　バス課題の設定と演習

第21回　３和音のまとめ

第22回　Ⅴ7の和音の概説・限定進行音について

第23回　Ⅴ7の和音の演習　①　定型の確認

第24回　Ⅴ7の和音の演習　②　Ⅴ7の第２転回形の処理

第25回　Ⅴ7の和音の演習　③　全終止（Ⅴ7-Ⅰ）の処理

第26回　Ⅴ7の和音の演習　④　バス課題の設定と演習（長調）

第27回　Ⅴ7の和音の演習　⑤　バス課題の設定と演習（短調）

第28回　Ⅴ7の和音のまとめ

第29回　ハーモニー演習①の総合課題練習

第30回　ハーモニー演習①の総まとめ

履修上の注意

前期末授業内小テストの成績を参考とし、学年末に行う共通試験の結果によって評価します（詳細は授業内で説明します）。教科書のほか、専用五線ノートを必ず持参すること。内容の区切りごとに、理解度と実力の確認を行います。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業は演習の要素が大きいので、予習として自分で課題を解く習慣を身につけること（60分）。また復習として授業で解説された課題についてピアノ等で弾き、理論的な知識を耳からも定着させていくこと（30分）。前期の授業内小テストについては、後期のはじめに解答の解説を行います。

教科書・参考書

教科書：島岡 譲（執筆責任）他共著『和声―理論と実習―１』（音楽之友社）
A４版 12段 指定五線ノート：Music Book（音楽帳）No.M601(KYOKUTO NOTE)

科目名－クラス名

ハーモニー演習①　K

曜日時限

火 1時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	1～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋の調性音楽において「和声進行」は一定の秩序に基づいており、作品を構成する根本原理となっています。歴史をふまえた音楽理論についての認識は、音楽を正しく理解し演奏するために欠かせないものといえるでしょう。「ハーモニー演習①」では、最も一般的な方法である４声体バス課題の演習を通して機能和声の理論を学びます。同時にキャリア形成のためのニーズに応え、コードネーム及びコード進行との関係についても解説します。これらの学修を通して、音楽を勉強する者としての専門知識、および音楽における理論的思考力を養っていきます。

学修成果

基本的な和声学の理論を習得することにより、調性音楽の原理を理解することができるようになります。楽曲分析を通じて作品を深く理解することは、読譜力を向上させることにつながります。さらには作曲・編曲や即興演奏など幅広い分野に通用する応用力を養うことができるようになります。

授業展開と内容

第1回　和声学を学ぶ意味。予備知識（楽典事項の確認）

第2回　４声体による３和音基本位置（標準配置）の概説

第3回　基本位置３和音の演習　①　共通音のある場合

第4回　基本位置３和音の演習　②　共通音のない場合

第5回　基本位置３和音の演習　③　Ⅱ-Ⅴ

第6回　基本位置３和音の演習　④　Ⅴ-Ⅵ

第7回　和音設定の原理（和音機能、終止等）

第8回　各種の調（基本位置３和音）の演習（長調）

第9回　各種の調（基本位置３和音）の演習（短調）

第10回　３和音第１転回位置の概説

第11回　３和音第１転回位置の演習　①　共通音のある場合

第12回　３和音第１転回位置の演習　②　共通音のない場合

第13回　３和音第１転回位置の演習　③　バス課題の設定と演習（長調）

第14回　３和音第１転回位置の演習　④　バス課題の設定と演習（短調）

第15回　前期のまとめと小テスト

第16回　前期小テストの解説、および前期範囲の復習

第17回　３和音第２転回位置の概説

第18回　３和音第２転回位置の演習　①　定型の確認

第19回　３和音第２転回位置の演習　②　第２型カデンツの応用

第20回　３和音第２転回位置の演習　③　バス課題の設定と演習

第21回　３和音のまとめ

第22回　Ⅴ7の和音の概説・限定進行音について

第23回　Ⅴ7の和音の演習　①　定型の確認

第24回　Ⅴ7の和音の演習　②　Ⅴ7の第２転回形の処理

第25回　Ⅴ7の和音の演習　③　全終止（Ⅴ7-Ⅰ）の処理

第26回　Ⅴ7の和音の演習　④　バス課題の設定と演習（長調）

第27回　Ⅴ7の和音の演習　⑤　バス課題の設定と演習（短調）

第28回　Ⅴ7の和音のまとめ

第29回　ハーモニー演習①の総合課題練習

第30回　ハーモニー演習①の総まとめ

履修上の注意

前期末授業内小テストの成績を参考とし、学年末に行う共通試験の結果によって評価します（詳細は授業内で説明します）。教科書のほか、専用五線ノートを必ず持参すること。内容の区切りごとに、理解度と実力の確認を行います。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業は演習の要素が大きいので、予習として自分で課題を解く習慣を身につけること（60分）。また復習として授業で解説された課題についてピアノ等で弾き、理論的な知識を耳からも定着させていくこと（30分）。前期の授業内小テストについては、後期のはじめに解答の解説を行います。

教科書・参考書

教科書：島岡 譲（執筆責任）他共著『和声―理論と実習―１』（音楽之友社）
A４版 12段 指定五線ノート：Music Book（音楽帳）No.M601(KYOKUTO NOTE)

科目名－クラス名

ハーモニー演習②　D

曜日時限

金 1時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋の調性音楽において「和声進行」は一定の秩序に基づいており、作品を構成する根本原理となっています。歴史をふまえた音楽理論についての認識は、音楽を正しく理解し演奏するために欠かせないものといえるでしょう。「ハーモニー演習②」では、「ハーモニー演習①」に続き、七の和音、九の和音、借用和音をバス課題の実習を通して機能和声の理論を学びます。同時にキャリア形成のためのニーズに応え、コードネーム及びコード進行との関係についても解説します。

学修成果

「ハーモニー演習②」の理論を修得することにより、調性音楽を理解することができるようになります。また、楽曲分析を通じて作品を深く理解することは、読譜力を向上させることにつながります。さらには作曲・編曲や即興演奏など幅広い分野に通用する応用力を養うことができるようになります。

授業展開と内容

第1回	ハーモニー演習①までの既習事項の確認と復習
第2回	Ⅴ7 の用法の確認と課題練習
第3回	Ⅴ7 の和音の根音省略形体の概説
第4回	Ⅴ7 の和音の根音省略形体の課題練習
第5回	Ⅴ7 の和音の根音省略形体の課題練習と応用
第6回	Ⅴ9 の和音の概説
第7回	Ⅴ9 の和音の課題練習
第8回	Ⅴ9 の和音の根音省略形体の概説
第9回	Ⅴ9 の和音の根音省略形体の課題練習
第10回	D諸和音の総合バス課題
第11回	Ⅱ7 の和音の概説
第12回	Ⅱ7 の和音の課題練習
第13回	Ⅱ7 の和音の課題練習と応用
第14回	Ⅱ7 の和音の総括
第15回	前期範囲のまとめ
第16回	前期範囲の復習と後期範囲のガイダンス
第17回	準固有和音の概説
第18回	準固有和音にの課題練習
第19回	準固有和音の課題練習と応用
第20回	準固有和音の総括
第21回	ⅴ度のⅤ度の諸和音の概説
第22回	ⅴ度のⅤ度の諸和音の課題練習
第23回	ⅴ度のⅤ度の諸和音の課題練習と応用
第24回	ⅴ度のⅤ度の諸和音について（転回位置の基礎）
第25回	ⅴ度のⅤ度の諸和音の実習（転回位置の応用）
第26回	既習の借用和音の総括
第27回	第２型、第３型カデンツにおけるＳ諸和音の課題練習
第28回	第２型、第３型カデンツにおけるＳ諸和音の課題練習と応用
第29回	ハーモニー演習②の総合課題練習
第30回	ハーモニー演習②の総まとめ

履修上の注意

教科書のほか、専用五線ノート（A４版、12段）を必ず持参すること。指定五線ノートは、Music Book（音楽帳）No.M601(KYOKUTO NOTE)。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業は演習の要素が大きいので、予習として自分で課題を解く習慣を身につけること（60分）。また復習として授業で解説された課題についてピアノ等で弾き、理論的な知識を耳からも定着させていくこと（30分）。前期の授業内小テストについては、後期のはじめに解答の解説を行う。

教科書・参考書

教科書：『和声－理論と実習－Ⅰ』島岡 譲（執筆責任）他、音楽之友社、および『和声－理論と実習－Ⅱ』島岡 譲（執筆責任）他、音楽之友社。その他、適宜授業内にてプリント配付する。

科目名－クラス名

ハーモニー演習②　A

曜日時限

火 2時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋の調性音楽において「和声進行」は一定の秩序に基づいており、作品を構成する根本原理となっています。歴史をふまえた音楽理論についての認識は、音楽を正しく理解し演奏するために欠かせないものといえるでしょう。「ハーモニー演習②」では、「ハーモニー演習①」に続き、七の和音、九の和音、借用和音をバス課題の実習を通して機能和声の理論を学びます。同時にキャリア形成のためのニーズに応え、コードネーム及びコード進行との関係についても解説します。

学修成果

「ハーモニー演習②」の理論を修得することにより、調性音楽を理解することができるようになります。また、楽曲分析を通じて作品を深く理解することは、読譜力を向上させることにつながります。さらには作曲・編曲や即興演奏など幅広い分野に通用する応用力を養うことができるようになります。

授業展開と内容

第1回　ハーモニー演習①までの既習事項の確認と復習

第2回　Ｖ７の用法の確認と課題練習

第3回　Ｖ７の和音の根音省略形体の概説

第4回　Ｖ７の和音の根音省略形体の課題練習

第5回　Ｖ７の和音の根音省略形体の課題練習と応用

第6回　Ｖ９の和音の概説

第7回　Ｖ９の和音の課題練習

第8回　Ｖ９の和音の根音省略形体の概説

第9回　Ｖ９の和音の根音省略形体の課題練習

第10回　Ｄ諸和音の総合バス課題

第11回　Ⅱ７の和音の概説

第12回　Ⅱ７の和音の課題練習

第13回　Ⅱ７の和音の課題練習と応用

第14回　Ⅱ７の和音の総括

第15回　前期範囲のまとめ

第16回　前期範囲の復習と後期範囲のガイダンス

第17回　準固有和音の概説

第18回　準固有和音にの課題練習

第19回　準固有和音の課題練習と応用

第20回　準固有和音の総括

第21回　ｖ度のＶ度の諸和音の概説

第22回　ｖ度のＶ度の諸和音の課題練習

第23回　ｖ度のＶ度の諸和音の課題練習と応用

第24回　ｖ度のＶ度の諸和音について（転回位置の基礎）

第25回　ｖ度のＶ度の諸和音の実習（転回位置の応用）

第26回　既習の借用和音の総括

第27回　第２型、第３型カデンツにおけるＳ諸和音の課題練習

第28回　第２型、第３型カデンツにおけるＳ諸和音の課題練習と応用

第29回　ハーモニー演習②の総合課題練習

第30回　ハーモニー演習②の総まとめ

履修上の注意

教科書のほか、専用五線ノート（A４版、12段）を必ず持参すること。指定五線ノートは、Music Book（音楽帳）No.M601(KYOKUTO NOTE)。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業は演習の要素が大きいので、予習として自分で課題を解く習慣を身につけること（60分）。また復習として授業で解説された課題についてピアノ等で弾き、理論的な知識を耳からも定着させていくこと（30分）。前期の授業内小テストについては、後期のはじめに解答の解説を行う。

教科書・参考書

教科書：『和声－理論と実習－Ⅰ』島岡 譲（執筆責任）他、音楽之友社、および『和声－理論と実習－Ⅱ』島岡 譲（執筆責任）他、音楽之友社。その他、適宜授業内にてプリント配付する。

科目名－クラス名

ハーモニー演習②　A

曜日時限

金 1時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋の調性音楽において「和声進行」は一定の秩序に基づいており、作品を構成する根本原理となっています。歴史をふまえた音楽理論についての認識は、音楽を正しく理解し演奏するために欠かせないものといえるでしょう。「ハーモニー演習②」では、「ハーモニー演習①」に続き、七の和音、九の和音、借用和音をバス課題の実習を通して機能和声の理論を学びます。同時にキャリア形成のためのニーズに応え、コードネーム及びコード進行との関係についても解説します。

学修成果

「ハーモニー演習②」の理論を修得することにより、調性音楽を理解することができるようになります。また、楽曲分析を通じて作品を深く理解することは、読譜力を向上させることにつながります。さらには作曲・編曲や即興演奏など幅広い分野に通用する応用力を養うことができるようになります。

授業展開と内容

第1回	ハーモニー演習①までの既習事項の確認と復習
第2回	Ｖ７の用法の確認と課題練習
第3回	Ｖ７の和音の根音省略形体の概説
第4回	Ｖ７の和音の根音省略形体の課題練習
第5回	Ｖ７の和音の根音省略形体の課題練習と応用
第6回	Ｖ９の和音の概説
第7回	Ｖ９の和音の課題練習
第8回	Ｖ９の和音の根音省略形体の概説
第9回	Ｖ９の和音の根音省略形体の課題練習
第10回	Ｄ諸和音の総合バス課題
第11回	Ⅱ７の和音の概説
第12回	Ⅱ７の和音の課題練習
第13回	Ⅱ７の和音の課題練習と応用
第14回	Ⅱ７の和音の総括
第15回	前期範囲のまとめ
第16回	前期範囲の復習と後期範囲のガイダンス
第17回	準固有和音の概説
第18回	準固有和音にの課題練習
第19回	準固有和音の課題練習と応用
第20回	準固有和音の総括
第21回	ｖ度のＶ度の諸和音の概説
第22回	ｖ度のＶ度の諸和音の課題練習
第23回	ｖ度のＶ度の諸和音の課題練習と応用
第24回	ｖ度のＶ度の諸和音について（転回位置の基礎）
第25回	ｖ度のＶ度の諸和音の実習（転回位置の応用）
第26回	既習の借用和音の総括
第27回	第２型、第３型カデンツにおけるＳ諸和音の課題練習
第28回	第２型、第３型カデンツにおけるＳ諸和音の課題練習と応用
第29回	ハーモニー演習②の総合課題練習
第30回	ハーモニー演習②の総まとめ

履修上の注意

教科書のほか、専用五線ノート（A４版、12段）を必ず持参すること。指定五線ノートは、Music Book（音楽帳）No.M601(KYOKUTO NOTE)。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業は演習の要素が大きいので、予習として自分で課題を解く習慣を身につけること（60分）。また復習として授業で解説された課題についてピアノ等で弾き、理論的な知識を耳からも定着させていくこと（30分）。前期の授業内小テストについては、後期のはじめに解答の解説を行う。

教科書・参考書

教科書：『和声－理論と実習－Ⅰ』島岡 譲（執筆責任）他、音楽之友社、および『和声－理論と実習－Ⅱ』島岡 譲（執筆責任）他、音楽之友社。その他、適宜授業内にてプリント配付する。

科目名－クラス名

ハーモニー演習②　E

曜日時限

火 2時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋の調性音楽において「和声進行」は一定の秩序に基づいており、作品を構成する根本原理となっています。歴史をふまえた音楽理論についての認識は、音楽を正しく理解し演奏するために欠かせないものといえるでしょう。「ハーモニー演習②」では、「ハーモニー演習①」に続き、七の和音、九の和音、借用和音をバス課題の実習を通して機能和声の理論を学びます。同時にキャリア形成のためのニーズに応え、コードネーム及びコード進行との関係についても解説します。

学修成果

「ハーモニー演習②」の理論を修得することにより、調性音楽を理解することができるようになります。また、楽曲分析を通じて作品を深く理解することは、読譜力を向上させることにつながります。さらには作曲・編曲や即興演奏など幅広い分野に通用する応用力を養うことができるようになります。

授業展開と内容

第1回	ハーモニー演習①までの既習事項の確認と復習
第2回	Ⅴ7の用法の確認と課題練習
第3回	Ⅴ7の和音の根音省略形体の概説
第4回	Ⅴ7の和音の根音省略形体の課題練習
第5回	Ⅴ7の和音の根音省略形体の課題練習と応用
第6回	Ⅴ9の和音の概説
第7回	Ⅴ9の和音の課題練習
第8回	Ⅴ9の和音の根音省略形体の概説
第9回	Ⅴ9の和音の根音省略形体の課題練習
第10回	D諸和音の総合バス課題
第11回	Ⅱ7の和音の概説
第12回	Ⅱ7の和音の課題練習
第13回	Ⅱ7の和音の課題練習と応用
第14回	Ⅱ7の和音の総括
第15回	前期範囲のまとめ
第16回	前期範囲の復習と後期範囲のガイダンス
第17回	準固有和音の概説
第18回	準固有和音にの課題練習
第19回	準固有和音の課題練習と応用
第20回	準固有和音の総括
第21回	ⅴ度のⅤ度の諸和音の概説
第22回	ⅴ度のⅤ度の諸和音の課題練習
第23回	ⅴ度のⅤ度の諸和音の課題練習と応用
第24回	ⅴ度のⅤ度の諸和音について（転回位置の基礎）
第25回	ⅴ度のⅤ度の諸和音の実習（転回位置の応用）
第26回	既習の借用和音の総括
第27回	第２型、第３型カデンツにおけるS諸和音の課題練習
第28回	第２型、第３型カデンツにおけるS諸和音の課題練習と応用
第29回	ハーモニー演習②の総合課題練習
第30回	ハーモニー演習②の総まとめ

履修上の注意

教科書のほか、専用五線ノート（A４版、12段）を必ず持参すること。指定五線ノートは、Music Book（音楽帳）No.M601(KYOKUTO NOTE)。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業は演習の要素が大きいので、予習として自分で課題を解く習慣を身につけること（60分）。また復習として授業で解説された課題についてピアノ等で弾き、理論的な知識を耳からも定着させていくこと（30分）。前期の授業内小テストについては、後期のはじめに解答の解説を行う。

教科書・参考書

教科書：『和声－理論と実習－Ⅰ』島岡 譲（執筆責任）他、音楽之友社、および『和声－理論と実習－Ⅱ』島岡 譲（執筆責任）他、音楽之友社。その他、適宜授業内にてプリント配付する。

科目名－クラス名

ポリフォニー演習　A

曜日時限

水 2時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	3～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	50	0	50	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋音楽の伝統的な理論として和声学とともに重要な技法の一つが対位法である。与えられた定旋律（カントゥス・フィルムス）をもとに、対旋律を作る訓練を中心としてその旋律の独立性や変化に注意をはらいながら、音楽を線と線の水平次元でとらえることができる能力を養成する。この授業では２声対位法について、年間を通じて理論の把握と書法について授業を進めていく。また対位法的書法で作曲された音楽作品の研究や鑑賞も取り入れる。

学修成果

履修者は２声の厳格対位法による理論を理解し、その書法を修得できるようになる。２声のカノンの作曲ができるようになる。対位法的な楽曲の分析力を修得できるようになる。

授業展開と内容

第1回　２声対位法に関する概説と年間を通じて学修する内容についてのガイダンス

第2回　２声対位法１対１（全音符対旋律）の基本理論の概説

第3回　２声対位法１対１（全音符対旋律）の書法の修得と演習（基礎）

第4回　２声対位法１対１（全音符対旋律）の書法の修得と演習（応用）

第5回　２声対位法１対２（２分音符対旋律）の基本理論の概説

第6回　２声対位法１対２（２分音符対旋律）の書法の修得と演習（基礎）

第7回　２声対位法１対２（２分音符対旋律）の書法の修得と演習（応用）

第8回　２声対位法１対２（２分音符対旋律）の書法の修得と演習（まとめ）

第9回　２声対位法１対４（４分音符対旋律）の基本理論の概説　対位法的楽曲の研究（対位法的小品など）

第10回　２声対位法１対４（４分音符対旋律）の書法の修得と演習（基礎）　対位法的楽曲の研究（対位法的小品など）

第11回　２声対位法１対４（４分音符対旋律）の書法の修得と演習（応用）　対位法的楽曲の研究（対位法的小品など）

第12回　２声対位法１対４（４分音符対旋律）の書法の修得と演習（まとめ）対位法的楽曲の研究（J.Sバッハ　2声インヴェンション）

第13回　２声対位法（移勢対旋律）の基本理論の概説　対位法的楽曲の研究（J.Sバッハ　2声インヴェンション）

第14回　２声対位法（移勢対旋律）の書法の修得と演習（基礎）　対位法的楽曲の研究（J.Sバッハ　2声インヴェンション）

第15回　前期の総括

第16回　２声対位法（移勢対旋律）の書法の修得と演習（応用）

第17回　２声対位法（移勢対旋律）の書法の修得と演習（まとめ）

第18回　２声対位法（華麗対旋律）の基本理論の概説

第19回　２声対位法（華麗対旋律）の書法の修得と演習（基礎）

第20回　２声対位法（華麗対旋律）の書法の修得と演習（応用）

第21回　２声対位法（華麗対旋律）の書法の修得と演習（まとめ）

第22回　２声自由対位法（華麗対旋律の様式による）の創作および転回可能対位法の基本理論の概説

第23回　２声自由対位法（華麗対旋律の様式による）の創作および転回可能対位法の書法の修得と演習（基礎）

第24回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の基本理論の概説、転回可能対位法の書法の修得と演習（応用）および２声自由対位法（華麗対旋律の様式による）のまとめ

第25回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の創作（基礎）　フーガに関する基礎知識について

第26回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の創作（応用）　フーガの基本形式について

第27回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の創作（まとめ）　フーガの研究

第28回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の提出作品の準備、２声対位法（華麗対旋律）および転回可能対位法の復習

第29回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の提出作品の創作、２声対位法（華麗対旋律）および２声自由対位法（華麗対旋律の様式による）の復習

第30回　後期の総括

履修上の注意

教科書と五線ノートを必ず用意すること。この授業は学生の進捗状況に応じて授業を進めていく。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業内で指示する課題を必ず実習して授業に臨むこと（準備学修の予習・復習として60分程度）。
取り組んだ課題のフィードバックは各授業回で行う。

教科書・参考書

教科書：山口博史著『パリ音楽院の方式による厳格対位法』（音楽之友社）。その他必要に応じてプリントを配付する。

科目名－クラス名

ポリフォニー演習

作曲・音デ/サンプロ/指揮Ａ

曜日時限

水 2時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	50	0	50	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋音楽の伝統的な理論として和声学とともに重要な技法の一つが対位法である。与えられた定旋律（カントゥス・フィルムス）をもとに、対旋律を作る訓練を中心としてその旋律の独立性や変化に注意をはらいながら、音楽を線と線の水平次元でとらえることができる能力を養成する。この授業では２声対位法について、年間を通じて理論の把握と書法について授業を進めていく。また対位法的書法で作曲された音楽作品の研究や鑑賞も取り入れる。

学修成果

履修者は２声の厳格対位法による理論を理解し、その書法を修得できるようになる。２声のカノンの作曲ができるようになる。対位法的な楽曲の分析力を修得できるようになる。

授業展開と内容

第1回　２声対位法に関する概説と年間を通じて学修する内容についてのガイダンス

第2回　２声対位法１対１（全音符対旋律）の基本理論の概説

第3回　２声対位法１対１（全音符対旋律）の書法の修得と演習（基礎）

第4回　２声対位法１対１（全音符対旋律）の書法の修得と演習（応用）

第5回　２声対位法１対２（２分音符対旋律）の基本理論の概説

第6回　２声対位法１対２（２分音符対旋律）の書法の修得と演習（基礎）

第7回　２声対位法１対２（２分音符対旋律）の書法の修得と演習（応用）

第8回　２声対位法１対２（２分音符対旋律）の書法の修得と演習（まとめ）

第9回　２声対位法１対４（４分音符対旋律）の基本理論の概説　対位法的楽曲の研究（対位法的小品など）

第10回　２声対位法１対４（４分音符対旋律）の書法の修得と演習（基礎）　対位法的楽曲の研究（対位法的小品など）

第11回　２声対位法１対４（４分音符対旋律）の書法の修得と演習（応用）　対位法的楽曲の研究（対位法的小品など）

第12回　２声対位法１対４（４分音符対旋律）の書法の修得と演習（まとめ）対位法的楽曲の研究（J.Sバッハ　2声インヴェンション）

第13回　２声対位法（移勢対旋律）の基本理論の概説　対位法的楽曲の研究（J.Sバッハ　2声インヴェンション）

第14回　２声対位法（移勢対旋律）の書法の修得と演習（基礎）　対位法的楽曲の研究（J.Sバッハ　2声インヴェンション）

第15回　前期の総括

第16回　２声対位法（移勢対旋律）の書法の修得と演習（応用）

第17回　２声対位法（移勢対旋律）の書法の修得と演習（まとめ）

第18回　２声対位法（華麗対旋律）の基本理論の概説

第19回　２声対位法（華麗対旋律）の書法の修得と演習（基礎）

第20回　２声対位法（華麗対旋律）の書法の修得と演習（応用）

第21回　２声対位法（華麗対旋律）の書法の修得と演習（まとめ）

第22回　２声自由対位法（華麗対旋律の様式による）の創作および転回可能対位法の基本理論の概説

第23回　２声自由対位法（華麗対旋律の様式による）の創作および転回可能対位法の書法の修得と演習（基礎）

第24回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の基本理論の概説、転回可能対位法の書法の修得と演習（応用）および２声自由対位法（華麗対旋律の様式による）のまとめ

第25回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の創作（基礎）　フーガに関する基礎知識について

第26回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の創作（応用）　フーガの基本形式について

第27回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の創作（まとめ）　フーガの研究

第28回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の提出作品の準備、２声対位法（華麗対旋律）および転回可能対位法の復習

第29回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の提出作品の創作、２声対位法（華麗対旋律）および２声自由対位法（華麗対旋律の様式による）の復習

第30回　後期の総括

履修上の注意

教科書と五線ノートを必ず用意すること。この授業は学生の進捗状況に応じて授業を進めていく。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業内で指示する課題を必ず実習して授業に臨むこと（準備学修の予習・復習として60分程度）。
取り組んだ課題のフィードバックは各授業回で行う。

教科書・参考書

教科書：山口博史著『パリ音楽院の方式による厳格対位法』（音楽之友社）。その他必要に応じてプリントを配付する。

科目名－クラス名

ポリフォニー演習　A

曜日時限

水 2時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	1～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	50	0	50	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋音楽の伝統的な理論として和声学とともに重要な技法の一つが対位法である。与えられた定旋律（カントゥス・フィルムス）をもとに、対旋律を作る訓練を中心としてその旋律の独立性や変化に注意をはらいながら、音楽を線と線の水平次元でとらえることができる能力を養成する。この授業では２声対位法について、年間を通じて理論の把握と書法について授業を進めていく。また対位法的書法で作曲された音楽作品の研究や鑑賞も取り入れる。

学修成果

履修者は２声の厳格対位法による理論を理解し、その書法を修得できるようになる。２声のカノンの作曲ができるようになる。対位法的な楽曲の分析力を修得できるようになる。

授業展開と内容

第1回　２声対位法に関する概説と年間を通じて学修する内容についてのガイダンス

第2回　２声対位法１対１（全音符対旋律）の基本理論の概説

第3回　２声対位法１対１（全音符対旋律）の書法の修得と演習（基礎）

第4回　２声対位法１対１（全音符対旋律）の書法の修得と演習（応用）

第5回　２声対位法１対２（２分音符対旋律）の基本理論の概説

第6回　２声対位法１対２（２分音符対旋律）の書法の修得と演習（基礎）

第7回　２声対位法１対２（２分音符対旋律）の書法の修得と演習（応用）

第8回　２声対位法１対２（２分音符対旋律）の書法の修得と演習（まとめ）

第9回　２声対位法１対４（４分音符対旋律）の基本理論の概説　対位法的楽曲の研究（対位法的小品など）

第10回　２声対位法１対４（４分音符対旋律）の書法の修得と演習（基礎）　対位法的楽曲の研究（対位法的小品など）

第11回　２声対位法１対４（４分音符対旋律）の書法の修得と演習（応用）　対位法的楽曲の研究（対位法的小品など）

第12回　２声対位法１対４（４分音符対旋律）の書法の修得と演習（まとめ）対位法的楽曲の研究（J.Sバッハ　2声インヴェンション）

第13回　２声対位法（移勢対旋律）の基本理論の概説　対位法的楽曲の研究（J.Sバッハ　2声インヴェンション）

第14回　２声対位法（移勢対旋律）の書法の修得と演習（基礎）　対位法的楽曲の研究（J.Sバッハ　2声インヴェンション）

第15回　前期の総括

第16回　２声対位法（移勢対旋律）の書法の修得と演習（応用）

第17回　２声対位法（移勢対旋律）の書法の修得と演習（まとめ）

第18回　２声対位法（華麗対旋律）の基本理論の概説

第19回　２声対位法（華麗対旋律）の書法の修得と演習（基礎）

第20回　２声対位法（華麗対旋律）の書法の修得と演習（応用）

第21回　２声対位法（華麗対旋律）の書法の修得と演習（まとめ）

第22回　２声自由対位法（華麗対旋律の様式による）の創作および転回可能対位法の基本理論の概説

第23回　２声自由対位法（華麗対旋律の様式による）の創作および転回可能対位法の書法の修得と演習（基礎）

第24回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の基本理論の概説、転回可能対位法の書法の修得と演習（応用）および２声自由対位法（華麗対旋律の様式による）のまとめ

第25回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の創作（基礎）　フーガに関する基礎知識について

第26回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の創作（応用）　フーガの基本形式について

第27回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の創作（まとめ）　フーガの研究

第28回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の提出作品の準備、２声対位法（華麗対旋律）および転回可能対位法の復習

第29回　２声のカノン（華麗対旋律の様式による）の提出作品の創作、２声対位法（華麗対旋律）および２声自由対位法（華麗対旋律の様式による）の復習

第30回　後期の総括

履修上の注意

教科書と五線ノートを必ず用意すること。この授業は学生の進捗状況に応じて授業を進めていく。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業内で指示する課題を必ず実習して授業に臨むこと（準備学修の予習・復習として60分程度）。
取り組んだ課題のフィードバックは各授業回で行う。

教科書・参考書

教科書：山口博史著『パリ音楽院の方式による厳格対位法』（音楽之友社）。その他必要に応じてプリントを配付する。

科目名－クラス名

ミュージックセオリー（上級）

曜日時限

火 3時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	1～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

作曲・編曲、楽曲分析に必要な和声学を中心とした理論と技術（専門的能力として基礎力、技術力、専門知識、学士力として論理的思考力）を修得することを目的とする。初級、中級、上級のグレード別に編成されていて、履修者は各々のレベルに沿って学修する。

学修成果

和声学をテーマとし、本科目では、内部変換、構成音の転位、反復進行、偶成和音、保続音、主題構成を持つバス課題、階梯導入を持つバス課題を修得する。

授業展開と内容

第1回　内部変換の概説

第2回　内部変換の技法について（基礎）

第3回　内部変換の技法について（応用）

第4回　内部変換の技法について（総括）

第5回　構成音の転位（１）の概説

第6回　構成音の転位（１）の技法について（基礎）

第7回　構成音の転位（１）の技法について（応用）

第8回　構成音の転位（１）の技法について（総括）

第9回　構成音の転位（２）の技法について（基礎）

第10回　構成音の転位（２）の技法について（応用）

第11回　構成音の転位（２）の技法について（総括）

第12回　和音の補遺の概説

第13回　和音の補遺の技法について

第14回　反復進行の概説

第15回　前期の振り返り・まとめ

第16回　反復進行の技法について（基礎）

第17回　反復進行の技法について（応用）

第18回　反復進行の技法について（総括）

第19回　偶成和音の概説

第20回　偶成和音の技法について（基礎）

第21回　偶成和音の技法について（応用）

第22回　保続音の概説

第23回　保続音の技法について（基礎）

第24回　保続音の技法について（応用）

第25回　主題的構成をもつバス課題の概説

第26回　主題的構成をもつバス課題の技法について（基礎）

第27回　主題的構成をもつバス課題の技法について（応用）

第28回　主題的構成をもつバス課題の技法について（総括）

第29回　総合練習

第30回　後期の振り返り・まとめ

履修上の注意

学修レベルによりクラス分けを行う。尚、この授業は学生の進捗状況に応じて授業を進めていく。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

準備学修として予習・復習は毎週の授業時に指示されるので、授業には必ず与えられた課題を実施（60分程度）してから臨むこと。取り組んだ課題のフィードバックは各授業回で行う。

教科書・参考書

教科書（購入必要）：「和声 ― 理論と実習 ―　Ⅲ巻」 島岡　譲（執筆責任）他、音楽之友社

科目名－クラス名

ミュージックセオリー（上級）

曜日時限

火 3時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	1～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

作曲・編曲、楽曲分析に必要な和声学を中心とした理論と技術（専門的能力として基礎力、技術力、専門知識、学士力として論理的思考力）を修得することを目的とする。初級、中級、上級のグレード別に編成されていて、履修者は各々のレベルに沿って学修する。

学修成果

和声学をテーマとし、本科目では、内部変換、構成音の転位、反復進行、偶成和音、保続音、主題構成を持つバス課題、階梯導入を持つバス課題を修得する。

授業展開と内容

第1回　内部変換の概説

第2回　内部変換の技法について（基礎）

第3回　内部変換の技法について（応用）

第4回　内部変換の技法について（総括）

第5回　構成音の転位（１）の概説

第6回　構成音の転位（１）の技法について（基礎）

第7回　構成音の転位（１）の技法について（応用）

第8回　構成音の転位（１）の技法について（総括）

第9回　構成音の転位（２）の技法について（基礎）

第10回　構成音の転位（２）の技法について（応用）

第11回　構成音の転位（２）の技法について（総括）

第12回　和音の補遺の概説

第13回　和音の補遺の技法について

第14回　反復進行の概説

第15回　前期の振り返り・まとめ

第16回　反復進行の技法について（基礎）

第17回　反復進行の技法について（応用）

第18回　反復進行の技法について（総括）

第19回　偶成和音の概説

第20回　偶成和音の技法について（基礎）

第21回　偶成和音の技法について（応用）

第22回　保続音の概説

第23回　保続音の技法について（基礎）

第24回　保続音の技法について（応用）

第25回　主題的構成をもつバス課題の概説

第26回　主題的構成をもつバス課題の技法について（基礎）

第27回　主題的構成をもつバス課題の技法について（応用）

第28回　主題的構成をもつバス課題の技法について（総括）

第29回　総合練習

第30回　後期の振り返り・まとめ

履修上の注意

学修レベルによりクラス分けを行う。尚、この授業は学生の進捗状況に応じて授業を進めていく。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

準備学修として予習・復習は毎週の授業時に指示されるので、授業には必ず与えられた課題を実施（60分程度）してから臨むこと。取り組んだ課題のフィードバックは各授業回で行う。

教科書・参考書

教科書（購入必要）：「和声 ― 理論と実習 ―　Ⅲ巻」 島岡　譲（執筆責任）他、音楽之友社

科目名－クラス名

鍵盤ソルフェージュ②　C

曜日時限

水 5時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

鍵盤ソルフェージュ①より高度な弾き歌い、伴奏づけ、移調奏などを鍵盤上で学修する。主要三和音を中心に、借用和音（副属七の和音）を学修する。授業はコードネームと和音記号で行う。ここでの弾き歌いとは「両手による開離位置での伴奏づけを中心としたもの」を指し、伴奏づけとは「メロディーに密集位置での伴奏づけ」を指す。移調奏なども年間を通じて積極的に行う。後期の最後に筆記試験で習熟度を確認する。定期試験で弾き歌いを中心とした実技試験を行う。
授業では音楽教育用コンピューターシステム(ミュージック･ラボラトリー）を使用する。教員と学生が1対1、または教員対複数学生でのやりとりが可能であり、グループ授業でありながら、同時にシステム上で交信することにより、教員が模範演奏を示したり、学生の演奏を確認するなど、個別にきめ細かく指導することができる。

学修成果

鍵盤ソルフェージュ①で学んだことを踏まえ、引き続き弾き歌い、伴奏づけ、移調奏が鍵盤上で即興的に演奏できるようになる。
また、グレード（3・4・5級程度）試験の対策になる。

授業展開と内容

第1回　テキストを使用して1年間の説明と授業開始。
テキストLevel3のNo.1~2を用いて、ホ短調（e moll）、ハ短調（c moll）の課題に取り組み、①で学修した内容の復習をし、より音楽的な弾き歌いに取り組む。同主短調や近親調からの借用を理解し、修得に努める。副属七の徹底、ドミナント→トニックの響き、及び転調による響きの変化を把握する。

第2回　副教材①を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第3回　テキストLevel3のNo.3~4を用いて、ニ長調（D dur）、ヘ長頭（F dur）の課題に取り組み、減五短七和音の復習に取り組む。また、引き続き同主短調や近親調からの借用を理解し、修得に努める。

第4回　副教材②を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第5回　テキストLevel3のNo.5~6を用いて、変ロ長調（B dur）、ト長頭（G dur）の課題に取り組み、減七和音、増三和音に取り組む。また、サブドミナントマイナーについて復習し、修得に努める。

第6回　副教材③を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第7回　テキストLevel3のNo.7~8を用いて、ヘ長調（F dur）、ニ短調（d moll）の課題に取り組み、平行調への転調を理解し、表現できるようにする。また、減五短七和音の修得に努める。

第8回　副教材④を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第9回　テキストLevel3のNo.9~11を用いて、イ長調（A dur）、ロ短調（h moll）、嬰ハ短調（cis moll）の課題に取り組み、減三和音、減七和音の修得に努める。また、長七和音の響きを確認し、修得に努める。

第10回　副教材⑤を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第11回　テキストLevel3のNo.12~13を用いて、変ホ長調（Es dur）の課題に取り組み、増三和音、減五短七和音の修得に努める。また、Ⅳm6から主和音への終止の響きを理解し、応用できるように修得する。

第12回　副教材⑥を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第13回　テキストLevel3のNo.14~15を用いて、ト長調（G dur）、ニ長調（D dur）の課題に取り組み、引き続き減五短七和音、減七和音の修得に努める。また、sus4から主和音への終止の響きを理解し、応用できるように修得する。

第14回　副教材⑦を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第15回　前期のまとめ。

第16回　テキストLevel3のNo.16~18を用いて、ト長調（G dur）、イ短調（a moll）、ヘ長調（F dur）の課題に取り組み、引き続き減五短七和音、減七和音の修得に努める。また、sus4から主和音への終止の響きを理解し、応用できるように修得する。

第17回　副教材⑧を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第18回　テキストLevel3のNo.19~20を用いて、ハ長調（C dur）、ニ短調（d moll）の課題に取り組み、引き続き減七和音の修得に努める。また、近親調からの和音の借用を理解し、応用できるように修得する。

第19回　副教材⑨を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第20回　テキストLevel3のNo.21~22を用いて、ニ短調（d moll）、嬰ヘ短調（fis moll）の課題に取り組み、引き続き減五短七和音、減七和音の修得に努める。また、近親調からの和音の借用を理解し、応用できるように修得する。

第21回　副教材⑩を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第22回　テキストLevel3のNo.23~24を用いて、イ短調（a moll）、ホ長調（E dur）の課題に取り組み、引き続き減五短七和音の修得に努める。また、長七和音の響

	きを確認し、修得に努める。
第23回	副教材⑪を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。
第24回	テキストLevel3のNo.25~26を用いて、ヘ長調（F dur）、イ長調（A dur）の課題に取り組み、引き続き減五短七和音、減七和音の修得に努める。また、sus4から主和音への終止の響きを理解し、応用できるように修得する。
第25回	副教材⑫を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。
第26回	テキストLevel3のNo.27~28を用いて、変ロ長調（B dur）、ホ長調（E dur）の課題に取り組み、引き続き減五短七和音、減七和音の修得に努める。また、sus4から主和音への終止の響きを理解し、応用できるように修得する。
第27回	副教材⑬を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。
第28回	テキストLevel3のNo.29を用いて、ニ長調（D dur）の課題に取り組み、引き続き減七和音の修得に努める。また、左手ベースの動きを工夫し、転回形を自ら考えられるように修得する。
第29回	副教材⑭を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。
第30回	1年のまとめ 筆記で習熟度を確認する

履修上の注意

定期試験では、筆記試験で習熟度を確認、実技試験は弾き歌いを中心に行う。試験の実施方法については担当教員の指示に従うこと。
イヤホン（有線・3.5mmミニプラグ）を持参することが望ましい。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業終了後には必ず復習をすること（60分）　スケールやカデンツなどの鍵盤での基礎的な練習を日課として行うこと。
15回目に行うまとめの課題は、授業内、または後期の最初に採点結果に基づくアドバイスをそれぞれに対して行う。
また毎授業内でも課題に対する個別アドバイスを行う。

教科書・参考書

（教）鍵盤ソルフェージュ（昭和音楽大学）
（参）授業の進行に応じて指定する。

科目名－クラス名

鍵盤ソルフェージュ②　C

曜日時限

水 5時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

鍵盤ソルフェージュ①より高度な弾き歌い、伴奏づけ、移調奏などを鍵盤上で学修する。主要三和音を中心に、借用和音（副属七の和音）を学修する。授業はコードネームと和音記号で行う。ここでの弾き歌いとは「両手による開離位置での伴奏づけを中心としたもの」を指し、伴奏づけとは「メロディーに密集位置での伴奏づけ」を指す。移調奏なども年間を通じて積極的に行う。後期の最後に筆記試験で習熟度を確認する。定期試験で弾き歌いを中心とした実技試験を行う。
授業では音楽教育用コンピューターシステム(ミュージック･ラボラトリー）を使用

学修成果

鍵盤ソルフェージュ①で学んだことを踏まえ、引き続き弾き歌い、伴奏づけ、移調奏が鍵盤上で即興的に演奏できるようになる。
また、グレード（3・4・5級程度）試験の対策になる。

授業展開と内容

第1回　テキストを使用して1年間の説明と授業開始。
テキストLevel3のNo.1~2を用いて、ホ短調（e moll）、ハ短調（c moll）の課題に取り組み、①で学修した内容の復習をし、より音楽的な弾き歌いに取り組む。同主短調や近親調からの借用を理解し、修得に努める。副属七の徹底、ドミナント→トニックの響き、及び転調による響きの変化を把握する。

第2回　副教材①を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第3回　テキストLevel3のNo.3~4を用いて、ニ長調（D dur）、ヘ長頭（F dur）の課題に取り組み、減五短七和音の復習に取り組む。また、引き続き同主短調や近親調からの借用を理解し、修得に努める。

第4回　副教材②を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第5回　テキストLevel3のNo.5~6を用いて、変ロ長調（B dur）、ト長頭（G dur）の課題に取り組み、減七和音、増三和音に取り組む。また、サブドミナントマイナーについて復習し、修得に努める。

第6回　副教材③を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第7回　テキストLevel3のNo.7~8を用いて、ヘ長調（F dur）、ニ短調（d moll）の課題に取り組み、平行調への転調を理解し、表現できるようにする。また、減五短七和音の修得に努める。

第8回　副教材④を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第9回　テキストLevel3のNo.9~11を用いて、イ長調（A dur）、ロ短調（h moll）、嬰ハ短調（cis moll）の課題に取り組み、減三和音、減七和音の修得に努める。また、長七和音の響きを確認し、修得に努める。

第10回　副教材⑤を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第11回　テキストLevel3のNo.12~13を用いて、変ホ長調（Es dur）の課題に取り組み、増三和音、減五短七和音の修得に努める。また、Ⅳm6から主和音への終止の響きを理解し、応用できるように修得する。

第12回　副教材⑥を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第13回　テキストLevel3のNo.14~15を用いて、ト長調（G dur）、ニ長調（D dur）の課題に取り組み、引き続き減五短七和音、減七和音の修得に努める。また、sus4から主和音への終止の響きを理解し、応用できるように修得する。

第14回　副教材⑦を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第15回　前期のまとめ。

第16回　テキストLevel3のNo.16~18を用いて、ト長調（G dur）、イ短調（a moll）、ヘ長調（F dur）の課題に取り組み、引き続き減五短七和音、減七和音の修得に努める。また、sus4から主和音への終止の響きを理解し、応用できるように修得する。

第17回　副教材⑧を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第18回　テキストLevel3のNo.19~20を用いて、ハ長調（C dur）、ニ短調（d moll）の課題に取り組み、引き続き減七和音の修得に努める。また、近親調からの和音の借用を理解し、応用できるように修得する。

第19回　副教材⑨を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第20回　テキストLevel3のNo.21~22を用いて、ニ短調（d moll）、嬰ヘ短調（fis moll）の課題に取り組み、引き続き減五短七和音、減七和音の修得に努める。また、近親調からの和音の借用を理解し、応用できるように修得する。

第21回　副教材⑩を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第22回　テキストLevel3のNo.23~24を用いて、イ短調（a moll）、ホ長調（E dur）の課題に取り組み、引き続き減五短七和音の修得に努める。また、長七和音の響きを確認し、修得に努める。

第23回　副教材⑪を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。

第24回	テキストLevel3のNo.25~26を用いて、ヘ長調（F dur）、イ長調（A dur）の課題に取り組み、引き続き減五短七和音、減七和音の修得に努める。また、sus4から主和音への終止の響きを理解し、応用できるように修得する。
第25回	副教材⑫を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。
第26回	テキストLevel3のNo.27~28を用いて、変ロ長調（B dur）、ホ長調（E dur）の課題に取り組み、引き続き減五短七和音、減七和音の修得に努める。また、sus4から主和音への終止の響きを理解し、応用できるように修得する。
第27回	副教材⑬を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。
第28回	テキストLevel3のNo.29を用いて、ニ長調（D dur）の課題に取り組み、引き続き減七和音の修得に努める。また、左手ベースの動きを工夫し、転回形を自ら考えられるように修得する。
第29回	副教材⑭を用いて、有名曲のコード譜を用いた弾き歌いの実践、伴奏付け、または移調奏に取り組む。
第30回	1年のまとめ 筆記で習熟度を確認する

履修上の注意

定期試験では、筆記試験で習熟度を確認、実技試験は弾き歌いを中心に行う。試験の実施方法については担当教員の指示に従うこと。
イヤホン（有線・3.5mmミニプラグ）を持参することが望ましい。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業終了後には必ず復習をすること（60分）　スケールやカデンツなどの鍵盤での基礎的な練習を日課として行うこと。
15回目に行うまとめの課題は、授業内、または後期の最初に採点結果に基づくアドバイスをそれぞれに対して行う。
また毎授業内でも課題に対する個別アドバイスを行う。

教科書・参考書

（教）鍵盤ソルフェージュ（昭和音楽大学）
（参）授業の進行に応じて指定する。

科目名－クラス名

対位法

曜日時限

水 3時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	3～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	50	0	50	0	0	100

教育到達目標と概要

この授業は作曲系各コースの専門科目としておかれている。対位法は和声学と共にクラシック音楽の理論の１つであり、自分自身の作品に生かし、また先人の作曲家の楽曲を理解するために必要・不可欠な知識と技術である。定旋律（カントゥス・フィルムス）をもとに、対旋律を作る訓練を中心としてその旋律の独立性に注意をはらいながら、音楽を線と線の水平次元でとらえることができる能力を養成し、多声音楽（ポリフォニー）の高度な技術を修得する。

学修成果

履修者は３声～４声を中心とする厳格対位法の理論を理解し、その書法を修得できるようになる。対位法的楽曲の構成を理解しその創作ができるようになる。

授業展開と内容

第1回　年間を通じて学習する内容についてのガイダンス　３声対位法（全音符対旋律）の理論の概説

第2回　３声対位法（全音符対旋律）の演習

第3回　３声対位法（２分音符対旋律）の理論の概説と演習

第4回　３声対位法（４分音符対旋律）の理論の概説と演習

第5回　３声対位法（移勢対旋律）の理論の概説と演習

第6回　３声対位法（全音符対旋律～移勢対旋律）のまとめ

第7回　３声対位法（華麗対旋律）の理論の概説と演習

第8回　３声対位法（華麗対旋律）の演習（基礎）展開可能対位法の理論の概説

第9回　３声対位法（華麗対旋律）の演習（応用）展開可能対位法の演習

第10回　３声対位法（混合類２分音符４分音符対旋律）の理論の概説と演習　展開可能対位法の演習

第11回　３声対位法（混合類２分音符４分音符対旋律）の演習（基礎）

第12回　３声対位法（混合類２分音符４分音符対旋律）の演習（応用）

第13回　３声対位法（混合類４分音符移勢対旋律）の理論の概説と演習　華麗対旋律の様式による３声のカノンの概説

第14回　３声対位法（混合類４分音符移勢対旋律）の演習（基礎）　華麗対旋律の様式による３声のカノンの分析研究

第15回　３声対位法（混合類４分音符移勢対旋律）の演習（応用）　華麗対旋律の様式による３声のカノンの分析研究および前期のまとめ

第16回　３声対位法（華麗対旋律～各種混合類）の復習　華麗対旋律の様式による３声のカノンの作曲演習（基礎）

第17回　華麗対旋律の様式による３声のカノンの作曲演習（応用）

第18回　華麗対旋律の様式による３声のカノンの作曲演習（総括）

第19回　４声対位法（全音符対旋律）の理論の概説と演習　対位法的楽曲の分析研究（基礎）

第20回　４声対位法（全音符対旋律）の演習　対位法的楽曲の分析研究（応用）

第21回　４声対位法（華麗対旋律）の理論の概説と演習　フーガの基本形式の概説

第22回　４声対位法（華麗対旋律）の演習（基礎）　フーガの分析研究（基礎）

第23回　４声対位法（華麗対旋律）の演習（応用）　フーガの分析研究（応用）

第24回　４声対位法（華麗対旋律）の演習（総括）　フーガの分析研究（総括）

第25回　４声対位法（大混合類）の理論の概説と演習　対位法的楽曲の作曲演習（基礎）

第26回　４声対位法（大混合類）の演習（基礎）　対位法的楽曲の作曲演習（応用）

第27回　４声対位法（大混合類）の演習（応用）　対位法的楽曲の作曲演習（総括）

第28回　４声対位法（華麗対旋律～大混合類）のまとめ

第29回　４声対位法およびの対位法的楽曲についての総合演習

第30回　後期のまとめ

履修上の注意

履修にあたってはポリフォニー演習の単位を修得していないと履修できない。この授業は学生の進捗状況に応じて授業を進めていく。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

予習・復習は毎週の授業時に指示されるので、授業には必ず与えられた課題を実施してから受講すること（準備学修の予習・復習として60分程度）。
取り組んだ課題のフィードバックは各授業回で行う。

教科書・参考書

パリ音楽院の方式による　厳格対位法　山口博史　著　　音楽之友社　　その他必要に応じてプリントを配付する。

科目名－クラス名

対位法

曜日時限

水 3時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	50	0	50	0	0	100

教育到達目標と概要

この授業は作曲系各コースの専門科目としておかれている。対位法は和声学と共にクラシック音楽の理論の１つであり、自分自身の作品に生かし、また先人の作曲家の楽曲を理解するために必要・不可欠な知識と技術である。定旋律（カントゥス・フィルムス）をもとに、対旋律を作る訓練を中心としてその旋律の独立性に注意をはらいながら、音楽を線と線の水平次元でとらえることができる能力を養成し、多声音楽（ポリフォニー）の高度な技術を修得する。

学修成果

履修者は３声～４声を中心とする厳格対位法の理論を理解し、その書法を修得できるようになる。対位法的楽曲の構成を理解しその創作ができるようになる。

授業展開と内容

第1回　年間を通じて学習する内容についてのガイダンス　３声対位法（全音符対旋律）の理論の概説

第2回　３声対位法（全音符対旋律）の演習

第3回　３声対位法（２分音符対旋律）の理論の概説と演習

第4回　３声対位法（４分音符対旋律）の理論の概説と演習

第5回　３声対位法（移勢対旋律）の理論の概説と演習

第6回　３声対位法（全音符対旋律～移勢対旋律）のまとめ

第7回　３声対位法（華麗対旋律）の理論の概説と演習

第8回　３声対位法（華麗対旋律）の演習（基礎）展開可能対位法の理論の概説

第9回　３声対位法（華麗対旋律）の演習（応用）展開可能対位法の演習

第10回　３声対位法（混合類２分音符４分音符対旋律）の理論の概説と演習　展開可能対位法の演習

第11回　３声対位法（混合類２分音符４分音符対旋律）の演習（基礎）

第12回　３声対位法（混合類２分音符４分音符対旋律）の演習（応用）

第13回　３声対位法（混合類４分音符移勢対旋律）の理論の概説と演習　華麗対旋律の様式による３声のカノンの概説

第14回　３声対位法（混合類４分音符移勢対旋律）の演習（基礎）　華麗対旋律の様式による３声のカノンの分析研究

第15回　３声対位法（混合類４分音符移勢対旋律）の演習（応用）　華麗対旋律の様式による３声のカノンの分析研究および前期のまとめ

第16回　３声対位法（華麗対旋律～各種混合類）の復習　華麗対旋律の様式による３声のカノンの作曲演習（基礎）

第17回　華麗対旋律の様式による３声のカノンの作曲演習（応用）

第18回　華麗対旋律の様式による３声のカノンの作曲演習（総括）

第19回　４声対位法（全音符対旋律）の理論の概説と演習　対位法的楽曲の分析研究（基礎）

第20回　４声対位法（全音符対旋律）の演習　対位法的楽曲の分析研究（応用）

第21回　４声対位法（華麗対旋律）の理論の概説と演習　フーガの基本形式の概説

第22回　４声対位法（華麗対旋律）の演習（基礎）　フーガの分析研究（基礎）

第23回　４声対位法（華麗対旋律）の演習（応用）　フーガの分析研究（応用）

第24回　４声対位法（華麗対旋律）の演習（総括）　フーガの分析研究（総括）

第25回　４声対位法（大混合類）の理論の概説と演習　対位法的楽曲の作曲演習（基礎）

第26回　４声対位法（大混合類）の演習（基礎）　対位法的楽曲の作曲演習（応用）

第27回　４声対位法（大混合類）の演習（応用）　対位法的楽曲の作曲演習（総括）

第28回　４声対位法（華麗対旋律～大混合類）のまとめ

第29回　４声対位法およびの対位法的楽曲についての総合演習

第30回　後期のまとめ

履修上の注意

履修にあたってはポリフォニー演習の単位を修得していないと履修できない。この授業は学生の進捗状況に応じて授業を進めていく。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

予習・復習は毎週の授業時に指示されるので、授業には必ず与えられた課題を実施してから受講すること（準備学修の予習・復習として60分程度）。
取り組んだ課題のフィードバックは各授業回で行う。

教科書・参考書

パリ音楽院の方式による　厳格対位法　山口博史　著　　音楽之友社　　その他必要に応じてプリントを配付する。

科目名－クラス名

聴音・視唱ソルフェージュ②　A

曜日時限

木 3時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

演奏や創作能力などを向上させるにはソルフェージュによる訓練は必要不可欠である。リズム感、フレーズ感、和声感、聴取感など、音楽を表現するための基礎となる能力を養うことがソルフェージュを学ぶ目的である。この授業では聴音と視唱の訓練により、ソルフェージュ能力を養成する。

学修成果

"この授業では、聴音（書き取り）と視唱（歌うことを通して（1）音程、リズム、音階などの感覚、（2）読譜、記譜、旋律暗記などの能力の養成）をテーマとし、単旋律、高音部譜表2声、大譜表2声、4声体和声の書き取り及び視唱の中級程度の能力を身につけることができる。"

授業展開と内容

第1回　聴音と視唱の学修方法および授業ガイダンス

第2回　シンコペーションとタイを多く含む長調、短調の単旋律聴音の導入、および視唱練習としてレガートに歌う練習を「トスティ50番」No.26を中心として行う

第3回　借用和音を多く含む多く含む大譜表の２声聴音の導入、およびレガートとメッツァヴォーチェに歌う練習を「トスティ50番」No.27を中心としてを行う

第4回　変化音を多く含む高音部譜表の２声聴音の導入、およびタイと三連符の視唱練習を「トスティ50番」No.28を中心として行う

第5回　三和音、七の和音を中心とした４声体和声（開離）聴音の導入、およびタイとアクセントの視唱練習を「トスティ50番」No.29を中心として行う

第6回　一時的な転調を含む長調、短調の単旋律聴音の基礎練習、およびレガートなフレーズで歌う練習を「トスティ50番」No.30を中心として行う

第7回　借用和音を多く含む大譜表の２声聴音の基礎練習、および三連符と16分音符の視唱練習を「トスティ50番」No.31を中心として行う

第8回　高音部譜表の２声聴音の基礎練習、および六連符の視唱練習を「トスティ50番」No.32を中心として行う

第9回　４声体和声（開離）聴音の基礎練習、および反復音階の視唱練習を「トスティ50番」No.33を中心として行う

第10回　近親転調を含む長調、短調の単旋律聴音の応用練習、および長いフレーズで歌う練習を「トスティ50番」No.34を中心として行う

第11回　高音部譜表の２声聴音の応用練習、および軽やかなパッセージの視唱練習を「トスティ50番」No.35を中心として行う

第12回　大譜表の２声聴音の応用練習、および付点と半音階の視唱練習を「トスティ50番」No.36を中心として行う

第13回　４声体和声（開離）聴音の応用練習、および修飾音の視唱練習を「トスティ50番」No.37を中心として行う

第14回　単旋律・２声・４声体和声（開離）の聴音、および「トスティ50番」No.26～No.37を復習する

第15回　前期授業内容による総合演習

第16回　前期で学修した内容を含む聴音、およびシンコペーションの視唱練習を「トスティ50番」No.38を中心として行う

第17回　長調、短調の単旋律聴音（複雑なリズム・変化音・転調を含む）、およびフィオリトゥーラの視唱練習を「トスティ50番」No.39を中心として行う

第18回　転調を含む大譜表の２声聴音、および半音階とグルッペットによる視唱練習を「トスティ50番」No.40を中心として行う

第19回　高音部譜表の２声聴音（複雑なリズム・変化音による）、およびレチタティーヴォの視唱練習を「トスティ50番」No.41を中心として行う

第20回　ドッペルドミナントの諸和音を含む４声体和声（開離）聴音、およびカヴァティーナ風の視唱練習を「トスティ50番」No.42を中心として行う

第21回　遠隔調への転調を伴った長調、短調の単旋律聴音、およびスケールの練習を「トスティ50番」No.43を中心として視唱練習を行う

第22回　大譜表の２声聴音（複雑なリズム・変化音・転調を含む）、およびスケールと回音の視唱練習を「トスティ50番」No.44を中心として行う

第23回　高音部譜表の２声聴音（不規則なリズム、タイを含む）、およびマルカート・スタッカートの視唱練習を「トスティ50番」No.45を中心として行う

第24回　副属七の諸和音を多く含む４声体和声（開離）聴音、およびアルペッジョの視唱練習を「トスティ50番」No.46を中心として行う

第25回　長調、短調の単旋律聴音（五連符やタイ、遠隔調への転調を伴う）、およびトリルの視唱練習を「トスティ50番」No.47を中心として行う

第26回　大譜表の２声聴音（変拍子を含む）の総括的練習、および半音階の視唱練習を「トスティ50番」No.48を中心として行う

第27回　高音部譜表の２声聴音の総括的練習、および装飾的パッセージの視唱練習を「トスティ50番」No.49を中心として行う

第28回　ナポリの六等の変化和音、副属七の諸和音を含めた４声体和声（開離）聴音、および歌とピアノの対話による視唱練習を「トスティ50番」No.50を中心として行う

第29回　総合的な内容を盛り込んだ聴音、および「トスティ50番」No.38～50を復習する

第30回　後期試験内容に即した演習

履修上の注意

クラス分けを行うので指定されたクラスで受講すること

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

毎回の予習、復習、反復練習を十分に行うこと。視唱は楽譜を見るだけでなく、きちんと声を出して練習すること。聴音は授業内で実習した課題を鍵盤楽器などを用いて復習すること（120分/週）。15回目に行う総合演習の課題は、授業内、または後期の最初に採点結果に基づくアドバイスをそれぞれに対して行う。また毎授業内でも課題に対する個別アドバイスを行う。

教科書・参考書

「トスティ50番」中声用　畑中良輔他　（全音楽譜出版社）

科目名－クラス名

聴音・視唱ソルフェージュ②　B

曜日時限

木 3時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

演奏や創作能力などを向上させるにはソルフェージュによる訓練は必要不可欠である。リズム感、フレーズ感、和声感、聴取感など、音楽を表現するための基礎となる能力を養うことがソルフェージュを学ぶ目的である。この授業では聴音と視唱の訓練により、ソルフェージュ能力を養成する。

学修成果

"この授業では、聴音（書き取り）と視唱（歌うことを通して（1）音程、リズム、音階などの感覚、（2）読譜、記譜、旋律暗記などの能力の養成）をテーマとし、単旋律、高音部譜表2声、大譜表2声、4声体和声の書き取り及び視唱の中級程度の能力を身につけることができる。"

授業展開と内容

第1回　聴音と視唱の学修方法および授業ガイダンス

第2回　シンコペーションとタイを多く含む長調、短調の単旋律聴音の導入、および視唱練習としてレガートに歌う練習を「トスティ50番」No.26を中心として行う

第3回　借用和音を多く含む多く含む大譜表の２声聴音の導入、およびレガートとメッツァヴォーチェに歌う練習を「トスティ50番」No.27を中心としてを行う

第4回　変化音を多く含む高音部譜表の２声聴音の導入、およびタイと三連符の視唱練習を「トスティ50番」No.28を中心として行う

第5回　三和音、七の和音を中心とした４声体和声（開離）聴音の導入、およびタイとアクセントの視唱練習を「トスティ50番」No.29を中心として行う

第6回　一時的な転調を含む長調、短調の単旋律聴音の基礎練習、およびレガートなフレーズで歌う練習を「トスティ50番」No.30を中心として行う

第7回　借用和音を多く含む大譜表の２声聴音の基礎練習、および三連符と16分音符の視唱練習を「トスティ50番」No.31を中心として行う

第8回　高音部譜表の２声聴音の基礎練習、および六連符の視唱練習を「トスティ50番」No.32を中心として行う

第9回　４声体和声（開離）聴音の基礎練習、および反復音階の視唱練習を「トスティ50番」No.33を中心として行う

第10回　近親転調を含む長調、短調の単旋律聴音の応用練習、および長いフレーズで歌う練習を「トスティ50番」No.34を中心として行う

第11回　高音部譜表の２声聴音の応用練習、および軽やかなパッセージの視唱練習を「トスティ50番」No.35を中心として行う

第12回　大譜表の２声聴音の応用練習、および付点と半音階の視唱練習を「トスティ50番」No.36を中心として行う

第13回　４声体和声（開離）聴音の応用練習、および修飾音の視唱練習を「トスティ50番」No.37を中心として行う

第14回　単旋律・２声・４声体和声（開離）の聴音、および「トスティ50番」No.26～No.37を復習する

第15回　前期授業内容による総合演習

第16回　前期で学修した内容を含む聴音、およびシンコペーションの視唱練習を「トスティ50番」No.38を中心として行う

第17回　長調、短調の単旋律聴音（複雑なリズム・変化音・転調を含む）、およびフィオリトゥーラの視唱練習を「トスティ50番」No.39を中心として行う

第18回　転調を含む大譜表の２声聴音、および半音階とグルッペットによる視唱練習を「トスティ50番」No.40を中心として行う

第19回　高音部譜表の２声聴音（複雑なリズム・変化音による）、およびレチタティーヴォの視唱練習を「トスティ50番」No.41を中心として行う

第20回　ドッペルドミナントの諸和音を含む４声体和声（開離）聴音、およびカヴァティーナ風の視唱練習を「トスティ50番」No.42を中心として行う

第21回　遠隔調への転調を伴った長調、短調の単旋律聴音、およびスケールの練習を「トスティ50番」No.43を中心として視唱練習を行う

第22回　大譜表の２声聴音（複雑なリズム・変化音・転調を含む）、およびスケールと回音の視唱練習を「トスティ50番」No.44を中心として行う

第23回　高音部譜表の２声聴音（不規則なリズム、タイを含む）、およびマルカート・スタッカートの視唱練習を「トスティ50番」No.45を中心として行う

第24回　副属七の諸和音を多く含む４声体和声（開離）聴音、およびアルペッジョの視唱練習を「トスティ50番」No.46を中心として行う

第25回　長調、短調の単旋律聴音（五連符やタイ、遠隔調への転調を伴う）、およびトリルの視唱練習を「トスティ50番」No.47を中心として行う

第26回　大譜表の２声聴音（変拍子を含む）の総括的練習、および半音階の視唱練習を「トスティ50番」No.48を中心として行う

第27回　高音部譜表の２声聴音の総括的練習、および装飾的パッセージの視唱練習を「トスティ50番」No.49を中心として行う

第28回　ナポリの六等の変化和音、副属七の諸和音を含めた４声体和声（開離）聴音、および歌とピアノの対話による視唱練習を「トスティ50番」No.50を中心として行う

第29回　総合的な内容を盛り込んだ聴音、および「トスティ50番」No.38～50を復習する

第30回　後期試験内容に即した演習

履修上の注意

クラス分けを行うので指定されたクラスで受講すること

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

毎回の予習、復習、反復練習を十分に行うこと。視唱は楽譜を見るだけでなく、きちんと声を出して練習すること。聴音は授業内で実習した課題を鍵盤楽器などを用いて復習すること（120分/週）。15回目に行う総合演習の課題は、授業内、または後期の最初に採点結果に基づくアドバイスをそれぞれに対して行う。また毎授業内でも課題に対する個別アドバイスを行う。

教科書・参考書

「トスティ50番」中声用　畑中良輔他　（全音楽譜出版社）

科目名－クラス名

聴音・視唱ソルフェージュ②　A

曜日時限

木 3時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

演奏や創作能力などを向上させるにはソルフェージュによる訓練は必要不可欠である。リズム感、フレーズ感、和声感、聴取感など、音楽を表現するための基礎となる能力を養うことがソルフェージュを学ぶ目的である。この授業では聴音と視唱の訓練により、ソルフェージュ能力を養成する。

学修成果

"この授業では、聴音（書き取り）と視唱（歌うことを通して（1）音程、リズム、音階などの感覚、（2）読譜、記譜、旋律暗記などの能力の養成）をテーマとし、単旋律、高音部譜表2声、大譜表2声、4声体和声の書き取り及び視唱の中級程度の能力を身につけることができる。"

授業展開と内容

第1回　聴音と視唱の学修方法および授業ガイダンス

第2回　シンコペーションとタイを多く含む長調、短調の単旋律聴音の導入、および視唱練習としてレガートに歌う練習を「トスティ50番」No.26を中心として行う

第3回　借用和音を多く含む多く含む大譜表の２声聴音の導入、およびレガートとメッツァヴォーチェに歌う練習を「トスティ50番」No.27を中心としてを行う

第4回　変化音を多く含む高音部譜表の２声聴音の導入、およびタイと三連符の視唱練習を「トスティ50番」No.28を中心として行う

第5回　三和音、七の和音を中心とした４声体和声（開離）聴音の導入、およびタイとアクセントの視唱練習を「トスティ50番」No.29を中心として行う

第6回　一時的な転調を含む長調、短調の単旋律聴音の基礎練習、およびレガートなフレーズで歌う練習を「トスティ50番」No.30を中心として行う

第7回　借用和音を多く含む大譜表の２声聴音の基礎練習、および三連符と16分音符の視唱練習を「トスティ50番」No.31を中心として行う

第8回　高音部譜表の２声聴音の基礎練習、および六連符の視唱練習を「トスティ50番」No.32を中心として行う

第9回　４声体和声（開離）聴音の基礎練習、および反復音階の視唱練習を「トスティ50番」No.33を中心として行う

第10回　近親転調を含む長調、短調の単旋律聴音の応用練習、および長いフレーズで歌う練習を「トスティ50番」No.34を中心として行う

第11回　高音部譜表の２声聴音の応用練習、および軽やかなパッセージの視唱練習を「トスティ50番」No.35を中心として行う

第12回　大譜表の２声聴音の応用練習、および付点と半音階の視唱練習を「トスティ50番」No.36を中心として行う

第13回　４声体和声（開離）聴音の応用練習、および修飾音の視唱練習を「トスティ50番」No.37を中心として行う

第14回　単旋律・２声・４声体和声（開離）の聴音、および「トスティ50番」No.26～No.37を復習する

第15回　前期授業内容による総合演習

第16回　前期で学修した内容を含む聴音、およびシンコペーションの視唱練習を「トスティ50番」No.38を中心として行う

第17回　長調、短調の単旋律聴音（複雑なリズム・変化音・転調を含む）、およびフィオリトゥーラの視唱練習を「トスティ50番」No.39を中心として行う

第18回　転調を含む大譜表の２声聴音、および半音階とグルッペットによる視唱練習を「トスティ50番」No.40を中心として行う

第19回　高音部譜表の２声聴音（複雑なリズム・変化音による）、およびレチタティーヴォの視唱練習を「トスティ50番」No.41を中心として行う

第20回　ドッペルドミナントの諸和音を含む４声体和声（開離）聴音、およびカヴァティーナ風の視唱練習を「トスティ50番」No.42を中心として行う

第21回　遠隔調への転調を伴った長調、短調の単旋律聴音、およびスケールの練習を「トスティ50番」No.43を中心として視唱練習を行う

第22回　大譜表の２声聴音（複雑なリズム・変化音・転調を含む）、およびスケールと回音の視唱練習を「トスティ50番」No.44を中心として行う

第23回　高音部譜表の２声聴音（不規則なリズム、タイを含む）、およびマルカート・スタッカートの視唱練習を「トスティ50番」No.45を中心として行う

第24回　副属七の諸和音を多く含む４声体和声（開離）聴音、およびアルペッジョの視唱練習を「トスティ50番」No.46を中心として行う

第25回　長調、短調の単旋律聴音（五連符やタイ、遠隔調への転調を伴う）、およびトリルの視唱練習を「トスティ50番」No.47を中心として行う

第26回　大譜表の２声聴音（変拍子を含む）の総括的練習、および半音階の視唱練習を「トスティ50番」No.48を中心として行う

第27回　高音部譜表の２声聴音の総括的練習、および装飾的パッセージの視唱練習を「トスティ50番」No.49を中心として行う

第28回　ナポリの六等の変化和音、副属七の諸和音を含めた４声体和声（開離）聴音、および歌とピアノの対話による視唱練習を「トスティ50番」No.50を中心として行う

第29回　総合的な内容を盛り込んだ聴音、および「トスティ50番」No.38～50を復習する

第30回　後期試験内容に即した演習

履修上の注意

クラス分けを行うので指定されたクラスで受講すること

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

毎回の予習、復習、反復練習を十分に行うこと。視唱は楽譜を見るだけでなく、きちんと声を出して練習すること。聴音は授業内で実習した課題を鍵盤楽器などを用いて復習すること（120分/週）。15回目に行う総合演習の課題は、授業内、または後期の最初に採点結果に基づくアドバイスをそれぞれに対して行う。また毎授業内でも課題に対する個別アドバイスを行う。

教科書・参考書

「トスティ50番」中声用　畑中良輔他　（全音楽譜出版社）

科目名－クラス名

聴音・視唱ソルフェージュ②　B

曜日時限

木 3時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

演奏や創作能力などを向上させるにはソルフェージュによる訓練は必要不可欠である。リズム感、フレーズ感、和声感、聴取感など、音楽を表現するための基礎となる能力を養うことがソルフェージュを学ぶ目的である。この授業では聴音と視唱の訓練により、ソルフェージュ能力を養成する。

学修成果

"この授業では、聴音（書き取り）と視唱（歌うことを通して（1）音程、リズム、音階などの感覚、（2）読譜、記譜、旋律暗記などの能力の養成）をテーマとし、単旋律、高音部譜表2声、大譜表2声、4声体和声の書き取り及び視唱の中級程度の能力を身につけることができる。"

授業展開と内容

第1回　聴音と視唱の学修方法および授業ガイダンス

第2回　シンコペーションとタイを多く含む長調、短調の単旋律聴音の導入、および視唱練習としてレガートに歌う練習を「トスティ50番」No.26を中心として行う

第3回　借用和音を多く含む多く含む大譜表の２声聴音の導入、およびレガートとメッツァヴォーチェに歌う練習を「トスティ50番」No.27を中心としてを行う

第4回　変化音を多く含む高音部譜表の２声聴音の導入、およびタイと三連符の視唱練習を「トスティ50番」No.28を中心として行う

第5回　三和音、七の和音を中心とした４声体和声（開離）聴音の導入、およびタイとアクセントの視唱練習を「トスティ50番」No.29を中心として行う

第6回　一時的な転調を含む長調、短調の単旋律聴音の基礎練習、およびレガートなフレーズで歌う練習を「トスティ50番」No.30を中心として行う

第7回　借用和音を多く含む大譜表の２声聴音の基礎練習、および三連符と16分音符の視唱練習を「トスティ50番」No.31を中心として行う

第8回　高音部譜表の２声聴音の基礎練習、および六連符の視唱練習を「トスティ50番」No.32を中心として行う

第9回　４声体和声（開離）聴音の基礎練習、および反復音階の視唱練習を「トスティ50番」No.33を中心として行う

第10回　近親転調を含む長調、短調の単旋律聴音の応用練習、および長いフレーズで歌う練習を「トスティ50番」No.34を中心として行う

第11回　高音部譜表の２声聴音の応用練習、および軽やかなパッセージの視唱練習を「トスティ50番」No.35を中心として行う

第12回　大譜表の２声聴音の応用練習、および付点と半音階の視唱練習を「トスティ50番」No.36を中心として行う

第13回　４声体和声（開離）聴音の応用練習、および修飾音の視唱練習を「トスティ50番」No.37を中心として行う

第14回　単旋律・２声・４声体和声（開離）の聴音、および「トスティ50番」No.26～No.37を復習する

第15回　前期授業内容による総合演習

第16回　前期で学修した内容を含む聴音、およびシンコペーションの視唱練習を「トスティ50番」No.38を中心として行う

第17回　長調、短調の単旋律聴音（複雑なリズム・変化音・転調を含む）、およびフィオリトゥーラの視唱練習を「トスティ50番」No.39を中心として行う

第18回　転調を含む大譜表の２声聴音、および半音階とグルッペットによる視唱練習を「トスティ50番」No.40を中心として行う

第19回　高音部譜表の２声聴音（複雑なリズム・変化音による）、およびレチタティーヴォの視唱練習を「トスティ50番」No.41を中心として行う

第20回　ドッペルドミナントの諸和音を含む４声体和声（開離）聴音、およびカヴァティーナ風の視唱練習を「トスティ50番」No.42を中心として行う

第21回　遠隔調への転調を伴った長調、短調の単旋律聴音、およびスケールの練習を「トスティ50番」No.43を中心として視唱練習を行う

第22回　大譜表の２声聴音（複雑なリズム・変化音・転調を含む）、およびスケールと回音の視唱練習を「トスティ50番」No.44を中心として行う

第23回　高音部譜表の２声聴音（不規則なリズム、タイを含む）、およびマルカート・スタッカートの視唱練習を「トスティ50番」No.45を中心として行う

第24回　副属七の諸和音を多く含む４声体和声（開離）聴音、およびアルペッジョの視唱練習を「トスティ50番」No.46を中心として行う

第25回　長調、短調の単旋律聴音（五連符やタイ、遠隔調への転調を伴う）、およびトリルの視唱練習を「トスティ50番」No.47を中心として行う

第26回　大譜表の２声聴音（変拍子を含む）の総括的練習、および半音階の視唱練習を「トスティ50番」No.48を中心として行う

第27回　高音部譜表の２声聴音の総括的練習、および装飾的パッセージの視唱練習を「トスティ50番」No.49を中心として行う

第28回　ナポリの六等の変化和音、副属七の諸和音を含めた４声体和声（開離）聴音、および歌とピアノの対話による視唱練習を「トスティ50番」No.50を中心として行う

第29回　総合的な内容を盛り込んだ聴音、および「トスティ50番」No.38～50を復習する

第30回　後期試験内容に即した演習

履修上の注意

クラス分けを行うので指定されたクラスで受講すること

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

毎回の予習、復習、反復練習を十分に行うこと。視唱は楽譜を見るだけでなく、きちんと声を出して練習すること。聴音は授業内で実習した課題を鍵盤楽器などを用いて復習すること（120分/週）。15回目に行う総合演習の課題は、授業内、または後期の最初に採点結果に基づくアドバイスをそれぞれに対して行う。また毎授業内でも課題に対する個別アドバイスを行う。

教科書・参考書

「トスティ50番」中声用　畑中良輔他　（全音楽譜出版社）

科目名－クラス名

楽曲分析特殊講義

曜日時限

金 2時限

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	1～	通年	4

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

作曲、指揮を対象に、高度な楽曲分析の能力を養うことを目標とする。19～21世紀の音楽の流れや作曲家について、また時代背景や作品の作曲経緯を研究する。室内楽作品・管弦楽作品・吹奏楽作品を取り上げ、作品を毎回特定のコンセプトによって選び、作曲者の音楽的意図とその意図を実現するための方法論、作品の構成、表現様式等を研究する。

学修成果

履修者は高度な楽曲分析を行い、その過程と成果を作曲と演奏に生かすことができるようになる。課題提出に取り組むことにより、実践的な分析力が身に付く。

授業展開と内容

第1回　楽曲分析の方法論について （テーマ・モティーフ）（担当　豊住）

第2回　楽曲分析の方法論について（形式・構成）（担当　豊住）

第3回　実践的な楽曲分析への取り組みについて（基礎）（担当　豊住）

第4回　実践的な楽曲分析への取り組みについて（応用）（担当　豊住）

第5回　ロマン派の音楽作品について　分析研究の導入（担当　豊住）

第6回　ロマン派の音楽作品について　実践的な分析研究（担当　豊住）

第7回　ロマン派の音楽作品について　分析研究の総括（担当　豊住）

第8回　印象派の音楽作品について　分析研究の導入（担当　豊住）

第9回　印象派の音楽作品について　実践的な分析研究（担当　豊住）

第10回　印象派の音楽作品について　分析研究の総括（担当　豊住）

第11回　20世紀初頭の音楽作品について　分析研究の導入（担当　豊住）

第12回　20世紀初頭の音楽作品について　実践的な分析研究 (担当 豊住)

第13回　20世紀初頭の音楽作品について　分析研究の総括 (担当 豊住)

第14回　課題提出の準備 (担当 豊住)

第15回　前期のまとめ(担当 豊住)

第16回　20世紀の音楽の主要なコンセプトと技法（担当　後藤）

第17回　調性の拡大と無調性：「機能」からの解放（担当　後藤）

第18回　調性の拡大と無調性：音階と旋法（担当　後藤）

第19回　調性の拡大と無調性：「無調」とは何か？（担当　後藤）

第20回　形式に対する新しいアプローチ：ソナタ……ラヴェルの場合（担当　後藤）

第21回　形式に対する新しいアプローチ：ソナタ……ベルクの場合（担当　後藤）

第22回　形式に対する新しいアプローチ：「形式」とは何か？（担当　後藤）

第23回　音列と12音技法：12音技法の基本的な考え方（担当　後藤）

第24回　音列と12音技法：技法の多様化……ウェーベルンの場合（担当　後藤）

第25回　移調の限られた旋法（担当　後藤）

第26回　新しい音楽構成の原理（担当　後藤）

第27回　異なる音楽様式の連関（担当　後藤）

第28回　引用とパロディ／異種イヴェントの混在（担当　後藤）

第29回　時間と空間の重層的構造（担当　後藤）

第30回　後期のまとめ（担当　後藤）

履修上の注意

理解できないところは、率直に質問し、積極的に講義を受け、配付資料は毎時間持参すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業時に指示した内容を学修し、事前に予習して授業に臨むこと。（約90分）取り組んだ課題のフィードバックは授業時に行う。その他の関連した音楽作品にも積極的に触れ、作曲家の傾向を感じ取ること。

教科書・参考書

必要に応じて授業時に資料を配付する。

科目名－クラス名

作曲・エレクトロニクス実技①

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	1～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	100	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋の古典的な音楽作品から現代の音楽作品に触れることによって、作曲のための方法論を見出す。週1回（60分）の個人レッスンにて、作曲理論の修得や作品分析をベースに作品の創作を学生の学修状況と個性にあわせて指導する。可能な限り作品を演奏する機会を持ち、実践的な作曲技術を学修する。専門的能力として基礎力、技術力、専門知識を得て、学士力として知識・理解を深め、汎用的能力、創造的思考力を養うことを目標とする。

学修成果

様々な作曲家の作品分析などを通して楽式の知識と感覚を身につけることをテーマとし、作曲に必要な基本の技術を身につけることができる。

授業展開と内容

第1回　楽曲分析（作曲家の時代背景）と作曲技法について

第2回　楽曲分析（作曲家と社会との関わり）と作曲技法について

第3回　楽曲分析（作曲家と芸術家との関わり）と作曲技法について

第4回　楽曲分析（カデンツと和声）と作曲技法について

第5回　楽曲分析（応用形式）と作曲技法について

第6回　楽器法と作曲技法の研究（導入）

第7回　楽器法と作曲技法の研究（基本）

第8回　楽器法と作曲技法の研究（応用）

第9回　楽器法と作曲技法の研究（実践）

第10回　楽器法と作曲技法の研究（総括）

第11回　楽曲分析（ソナタ形式）の研究と作曲技法の実践（導入）

第12回　楽曲分析（ソナタ形式）の研究と作曲技法の実践（基本）

第13回　楽曲分析（ソナタ形式）の研究と作曲技法の実践（応用）

第14回　楽曲分析（ソナタ形式）の研究と作曲技法の実践（総括）

第15回　前期の振り返り・まとめ

第16回　二重奏までの室内楽の創作研究（導入）

第17回　二重奏までの室内楽の創作研究（基本）

第18回　二重奏までの室内楽の創作研究（応用）

第19回　二重奏までの室内楽の創作研究（総括）

第20回　二重奏までの室内楽の作曲技法の実践（基本）

第21回　二重奏までの室内楽の作曲技法の実践（応用）

第22回　二重奏までの室内楽の作曲技法の実践（総括）

第23回　年度末提出作品の創作（曲の構想）

第24回　年度末提出作品の創作（モチーフ）

第25回　年度末提出作品の創作（構造）

第26回　年度末提出作品の創作（全体のスケッチ）

第27回　年度末提出作品の創作（全体のまとめ）

第28回　年度末提出作品の創作（仕上げ）

第29回　年度末提出作品の創作（総括）

第30回　年間の振り返り・まとめ

履修上の注意

作曲の実習はレッスン内だけでなく、予習・復習を含め日常的に取り組むこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

準備学修として予習・復習は毎週のレッスン時に指示されるので、必ず与えられた課題を実習してから臨むこと。取り組んだ課題のフィードバックは各レッスン回で行う。

教科書・参考書

適宜資料を配付する

科目名－クラス名

作曲・エレクトロニクス実技①

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	1～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	100	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋の古典的な音楽作品から現代の音楽作品に触れることによって、作曲のための方法論を見出す。週1回（60分）の個人レッスンにて、作曲理論の修得や作品分析をベースに作品の創作を学生の学修状況と個性にあわせて指導する。可能な限り作品を演奏する機会を持ち、実践的な作曲技術を学修する。専門的能力として基礎力、技術力、専門知識を得て、学士力として知識・理解を深め、汎用的能力、創造的思考力を養うことを目標とする。

学修成果

様々な作曲家の作品分析などを通して楽式の知識と感覚を身につけることをテーマとし、作曲に必要な基本の技術を身につけることができる。

授業展開と内容

第1回　楽曲分析（作曲家の時代背景）と作曲技法について

第2回　楽曲分析（作曲家と社会との関わり）と作曲技法について

第3回　楽曲分析（作曲家と芸術家との関わり）と作曲技法について

第4回　楽曲分析（カデンツと和声）と作曲技法について

第5回　楽曲分析（応用形式）と作曲技法について

第6回　楽器法と作曲技法の研究（導入）

第7回　楽器法と作曲技法の研究（基本）

第8回　楽器法と作曲技法の研究（応用）

第9回　楽器法と作曲技法の研究（実践）

第10回　楽器法と作曲技法の研究（総括）

第11回　楽曲分析（ソナタ形式）の研究と作曲技法の実践（導入）

第12回　楽曲分析（ソナタ形式）の研究と作曲技法の実践（基本）

第13回　楽曲分析（ソナタ形式）の研究と作曲技法の実践（応用）

第14回　楽曲分析（ソナタ形式）の研究と作曲技法の実践（総括）

第15回　前期の振り返り・まとめ

第16回　二重奏までの室内楽の創作研究（導入）

第17回　二重奏までの室内楽の創作研究（基本）

第18回　二重奏までの室内楽の創作研究（応用）

第19回　二重奏までの室内楽の創作研究（総括）

第20回　二重奏までの室内楽の作曲技法の実践（基本）

第21回　二重奏までの室内楽の作曲技法の実践（応用）

第22回　二重奏までの室内楽の作曲技法の実践（総括）

第23回　年度末提出作品の創作（曲の構想）

第24回　年度末提出作品の創作（モチーフ）

第25回　年度末提出作品の創作（構造）

第26回　年度末提出作品の創作（全体のスケッチ）

第27回　年度末提出作品の創作（全体のまとめ）

第28回　年度末提出作品の創作（仕上げ）

第29回　年度末提出作品の創作（総括）

第30回　年間の振り返り・まとめ

履修上の注意

作曲の実習はレッスン内だけでなく、予習・復習を含め日常的に取り組むこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

準備学修として予習・復習は毎週のレッスン時に指示されるので、必ず与えられた課題を実習してから臨むこと。取り組んだ課題のフィードバックは各レッスン回で行う。

教科書・参考書

適宜資料を配付する

科目名－クラス名

作曲・エレクトロニクス実技②

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	2～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	100	0	0	100

教育到達目標と概要

幅広く作曲ができるようになるための技量を身につける。週1回（60分）の個人レッスンにて、作曲理論の修得や作品分析をベースに作品の創作を学生の学修状況と個性にあわせて指導する。可能な限り作品を演奏する機会を持ち、実践的な作曲技術を学修する。エレクトロニカ系では基本的なDAWソフトでの作曲方法を学修する。専門的能力として基礎力、技術力、専門知識を得て、学士力として知識・理解を深め、汎用的能力、創造的思考力を養うことを目標とする。

学修成果

作曲・エレクトロニクス実技①で学んだ内容を踏まえて作曲技術を向上させることができる。

授業展開と内容

第1回	リズムの分析と作曲技法の導入（芸術音楽作曲系）、コンピュータを使用した音楽についての導入（エレクトロニカ系）
第2回	上記楽曲分析からの作曲技法の基本（芸術音楽作曲系）、コンピュータを使用した音楽についての基本（エレクトロニカ系）
第3回	上記楽曲分析からの作曲技法の実践（芸術音楽作曲系）、コンピュータを使用した音楽についての実践（エレクトロニカ系）
第4回	メロディーの分析と作曲技法の導入（芸術音楽作曲系）、コンピュータを使用した音楽についての導入（エレクトロニカ系）
第5回	上記楽曲分析からの作曲技法の基本（芸術音楽作曲系）、コンピュータを使用した音楽についての基本（エレクトロニカ系）
第6回	上記楽曲分析からの作曲技法の実践（芸術音楽作曲系）、コンピュータを使用した音楽についての実践（エレクトロニカ系）
第7回	１回～６回までの総括
第8回	クラシック音楽またはコンピュータ音楽の作曲技法の導入
第9回	クラシック音楽またはコンピュータ音楽の作曲技法の基本
第10回	クラシック音楽またはコンピュータ音楽の作曲技法の応用
第11回	クラシック音楽またはコンピュータ音楽の作曲技法の実践
第12回	アコースティック楽器または電子楽器を使用した楽曲制作の基礎
第13回	アコースティック楽器または電子楽器を使用した楽曲制作の応用
第14回	アコースティック楽器または電子楽器を使用した楽曲制作の実践
第15回	前期の振り返り・まとめ
第16回	二重奏から五重奏までの室内楽（芸術音楽作曲系）、DTM（エレクトロニカ系）の創作研究についての導入
第17回	二重奏から五重奏までの室内楽（芸術音楽作曲系）、DTM（エレクトロニカ系）の創作研究についての基本
第18回	二重奏から五重奏までの室内楽（芸術音楽作曲系）、DTM（エレクトロニカ系）の創作研究についての応用
第19回	二重奏から五重奏までの室内楽（芸術音楽作曲系）、DTM（エレクトロニカ系）の創作研究についての総括
第20回	二重奏から五重奏までの室内楽（芸術音楽作曲系）、DTM（エレクトロニカ系）の作曲技法についての基本
第21回	二重奏から五重奏までの室内楽（芸術音楽作曲系）、DTM（エレクトロニカ系）の作曲技法についての応用
第22回	二重奏から五重奏までの室内楽（芸術音楽作曲系）、DTM（エレクトロニカ系）の作曲技法についての総括
第23回	年度末提出作品の創作（曲の構想）
第24回	年度末提出作品の創作（モチーフ）
第25回	年度末提出作品の創作（構造）
第26回	年度末提出作品の創作（全体のスケッチ）
第27回	年度末提出作品の創作（全体のまとめ）
第28回	年度末提出作品の創作（仕上げ）
第29回	年度末提出作品の創作（総括）
第30回	年間の振り返り・まとめ

履修上の注意

作曲の実習はレッスン内だけでなく、予習・復習を含め日常的に取り組むこと

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

準備学修として予習・復習は毎週のレッスン時に指示されるので、必ず与えられた課題を実習してから臨むこと。取り組んだ課題のフィードバックは各レッスン回で行う。

教科書・参考書

適宜資料を配付する

科目名－クラス名

作曲・エレクトロニクス実技②

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	2～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	100	0	0	100

教育到達目標と概要

幅広く作曲ができるようになるための技量を身につける。週1回（60分）の個人レッスンにて、作曲理論の修得や作品分析をベースに作品の創作を学生の学修状況と個性にあわせて指導する。可能な限り作品を演奏する機会を持ち、実践的な作曲技術を学修する。エレクトロニカ系では基本的なDAWソフトでの作曲方法を学修する。専門的能力として基礎力、技術力、専門知識を得て、学士力として知識・理解を深め、汎用的能力、創造的思考力を養うことを目標とする。

学修成果

作曲・エレクトロニクス実技①で学んだ内容を踏まえて作曲技術を向上させることができる。

授業展開と内容

第1回	リズムの分析と作曲技法の導入（芸術音楽作曲系）、コンピュータを使用した音楽についての導入（エレクトロニカ系）
第2回	上記楽曲分析からの作曲技法の基本（芸術音楽作曲系）、コンピュータを使用した音楽についての基本（エレクトロニカ系）
第3回	上記楽曲分析からの作曲技法の実践（芸術音楽作曲系）、コンピュータを使用した音楽についての実践（エレクトロニカ系）
第4回	メロディーの分析と作曲技法の導入（芸術音楽作曲系）、コンピュータを使用した音楽についての導入（エレクトロニカ系）
第5回	上記楽曲分析からの作曲技法の基本（芸術音楽作曲系）、コンピュータを使用した音楽についての基本（エレクトロニカ系）
第6回	上記楽曲分析からの作曲技法の実践（芸術音楽作曲系）、コンピュータを使用した音楽についての実践（エレクトロニカ系）
第7回	１回～６回までの総括
第8回	クラシック音楽またはコンピュータ音楽の作曲技法の導入
第9回	クラシック音楽またはコンピュータ音楽の作曲技法の基本
第10回	クラシック音楽またはコンピュータ音楽の作曲技法の応用
第11回	クラシック音楽またはコンピュータ音楽の作曲技法の実践
第12回	アコースティック楽器または電子楽器を使用した楽曲制作の基礎
第13回	アコースティック楽器または電子楽器を使用した楽曲制作の応用
第14回	アコースティック楽器または電子楽器を使用した楽曲制作の実践
第15回	前期の振り返り・まとめ
第16回	二重奏から五重奏までの室内楽（芸術音楽作曲系）、DTM（エレクトロニカ系）の創作研究についての導入
第17回	二重奏から五重奏までの室内楽（芸術音楽作曲系）、DTM（エレクトロニカ系）の創作研究についての基本
第18回	二重奏から五重奏までの室内楽（芸術音楽作曲系）、DTM（エレクトロニカ系）の創作研究についての応用
第19回	二重奏から五重奏までの室内楽（芸術音楽作曲系）、DTM（エレクトロニカ系）の創作研究についての総括
第20回	二重奏から五重奏までの室内楽（芸術音楽作曲系）、DTM（エレクトロニカ系）の作曲技法についての基本
第21回	二重奏から五重奏までの室内楽（芸術音楽作曲系）、DTM（エレクトロニカ系）の作曲技法についての応用
第22回	二重奏から五重奏までの室内楽（芸術音楽作曲系）、DTM（エレクトロニカ系）の作曲技法についての総括
第23回	年度末提出作品の創作（曲の構想）
第24回	年度末提出作品の創作（モチーフ）
第25回	年度末提出作品の創作（構造）
第26回	年度末提出作品の創作（全体のスケッチ）
第27回	年度末提出作品の創作（全体のまとめ）
第28回	年度末提出作品の創作（仕上げ）
第29回	年度末提出作品の創作（総括）
第30回	年間の振り返り・まとめ

履修上の注意

作曲の実習はレッスン内だけでなく、予習・復習を含め日常的に取り組むこと

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

準備学修として予習・復習は毎週のレッスン時に指示されるので、必ず与えられた課題を実習してから臨むこと。取り組んだ課題のフィードバックは各レッスン回で行う。

教科書・参考書

適宜資料を配付する

科目名－クラス名

作曲・エレクトロニクス実技④

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	4～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	100	0	0	100

教育到達目標と概要

週1回（60分）の個人レッスン。卒業作品の創作に必要な技量を身に付けることを目標とする。作曲・エレクトロニクス実技①?③で学んだ内容を踏まえて作曲理論の修得や作品分析をベースに作品の創作を学生の学修状況と個性にあわせて指導する。可能な限り作品を演奏する機会を持ち、実践的な作曲技術を修得する。エレクトロニカ系ではコンピュータ音楽・録音制作・音響機器操作の技術を活かした創作を行う。専門的能力として基礎力、技術力、専門知識を得て、学士力として知識・理解を深め、汎用的能力、創造的思考力を養うことを目標とする。

学修成果

創作に必要な理論の理解と技術を用い、幅広い作品の創作ができるようになる。

授業展開と内容

第1回	卒業作品のテーマに基づいて、楽曲分析の導入（芸術音楽作曲系）、コンピュータを使用した音楽について（エレクトロニカ系）
第2回	上記楽曲分析からの作曲技法の導入（芸術音楽作曲系）、サウンドデザインの分析の導入（エレクトロニカ系）
第3回	卒業作品のテーマに基づいて、楽曲分析の基本（芸術音楽作曲系）、サウンドデザインの分析の基礎（エレクトロニカ系）
第4回	上記楽曲分析からの作曲技法の基本（芸術音楽作曲系）、サウンドデザインの分析の応用（エレクトロニカ系）
第5回	卒業作品のテーマに基づいて、楽曲分析の実践（芸術音楽作曲系）、サウンドデザインの技法の基礎（エレクトロニカ系）
第6回	上記楽曲分析からの作曲技法の実践（芸術音楽作曲系）、サウンドデザインの技法の応用（エレクトロニカ系）
第7回	卒業作品のテーマに基づいて、楽曲分析の総合演習（芸術音楽作曲系）、サウンドデザインの技法の実践（エレクトロニカ系）
第8回	上記楽曲分析からの作曲技法の総合演習（芸術音楽作曲系）、２?７回までの総括（エレクトロニカ系）
第9回	卒業作品のテーマに基づいて、楽器法の導入（芸術音楽作曲系）、DAWを使用した楽曲の分析の導入（エレクトロニカ系）
第10回	上記楽器法からの作曲技法の導入（芸術音楽作曲系）、DAWを使用した楽曲の分析の基礎（エレクトロニカ系）
第11回	卒業作品のテーマに基づいて、楽器法の基本（芸術音楽作曲系）、DAWを使用した楽曲の分析の応用（エレクトロニカ系）
第12回	上記楽器法からの作曲技法の基本（芸術音楽作曲系）、DAWを使用した楽曲制作の基礎（エレクトロニカ系）
第13回	卒業作品のテーマに基づいて、楽器法の実践（芸術音楽作曲系）、DAWを使用した楽曲制作の応用（エレクトロニカ系）
第14回	上記楽器法からの作曲技法の実践（芸術音楽作曲系）、DAWを使用した楽曲制作の実践（エレクトロニカ系）
第15回	前期の振り返り・まとめ
第16回	卒業作品のテーマに基づいた楽曲（芸術音楽作曲系）、コンピュータ音楽（エレクトロニカ系）の分析についての導入
第17回	卒業作品のテーマに基づいた楽曲（芸術音楽作曲系）、コンピュータ音楽（エレクトロニカ系）の分析についての基礎
第18回	卒業作品のテーマに基づいた楽曲（芸術音楽作曲系）、コンピュータ音楽（エレクトロニカ系）の分析についての応用
第19回	卒業作品のテーマに基づいた楽曲（芸術音楽作曲系）、コンピュータ音楽の楽曲制作（エレクトロニカ系）のについての導入
第20回	卒業作品のテーマに基づいた楽曲（芸術音楽作曲系）、コンピュータ音楽の楽曲制作（エレクトロニカ系）のについての応用
第21回	卒業作品のテーマに基づいた楽曲（芸術音楽作曲系）、コンピュータ音楽の楽曲制作（エレクトロニカ系）のについての実践
第22回	１回?６回までの総括
第23回	卒業作品の創作（コンセプトとテーマ）
第24回	卒業作品の創作（構想）
第25回	卒業作品の創作（モチーフ）
第26回	卒業作品の創作（構造）
第27回	卒業作品の創作（全体のスケッチ）
第28回	卒業作品の創作（全体のまとめ）
第29回	卒業作品の創作（仕上げ）
第30回	年間の振り返り・まとめ

履修上の注意

作曲の実習はレッスン内だけではなく、予習・復習を含めて日常的に取り組むこと

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

準備学修として予習・復習は毎週のレッスン時に指示されるので、必ず与えられた課題を実習してから臨むこと。取り組んだ課題のフィードバックは各レッスン回で行う。

教科書・参考書

適宜資料を配付する

科目名－クラス名

作曲・エレクトロニクス実技④

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	4～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	100	0	0	100

教育到達目標と概要

週1回（60分）の個人レッスン。卒業作品の創作に必要な技量を身に付けることを目標とする。作曲・エレクトロニクス実技①～③で学んだ内容を踏まえて作曲理論の修得や作品分析をベースに作品の創作を学生の学修状況と個性にあわせて指導する。可能な限り作品を演奏する機会を持ち、実践的な作曲技術を修得する。エレクトロニカ系ではコンピュータ音楽・録音制作・音響機器操作の技術を活かした創作を行う。専門的能力として基礎力、技術力、専門知識を得て、学士力として知識・理解を深め、汎用的能力、創造的思考力を養うことを目標とする。

学修成果

創作に必要な理論の理解と技術を用い、幅広い作品の創作ができるようになる。

授業展開と内容

第1回	卒業作品のテーマに基づいて、楽曲分析の導入（芸術音楽作曲系）、コンピュータを使用した音楽について（エレクトロニカ系）
第2回	上記楽曲分析からの作曲技法の導入（芸術音楽作曲系）、サウンドデザインの分析の導入（エレクトロニカ系）
第3回	卒業作品のテーマに基づいて、楽曲分析の基本（芸術音楽作曲系）、サウンドデザインの分析の基礎（エレクトロニカ系）
第4回	上記楽曲分析からの作曲技法の基本（芸術音楽作曲系）、サウンドデザインの分析の応用（エレクトロニカ系）
第5回	卒業作品のテーマに基づいて、楽曲分析の実践（芸術音楽作曲系）、サウンドデザインの技法の基礎（エレクトロニカ系）
第6回	上記楽曲分析からの作曲技法の実践（芸術音楽作曲系）、サウンドデザインの技法の応用（エレクトロニカ系）
第7回	卒業作品のテーマに基づいて、楽曲分析の総合演習（芸術音楽作曲系）、サウンドデザインの技法の実践（エレクトロニカ系）
第8回	上記楽曲分析からの作曲技法の総合演習（芸術音楽作曲系）、２～７回までの総括（エレクトロニカ系）
第9回	卒業作品のテーマに基づいて、楽器法の導入（芸術音楽作曲系）、DAWを使用した楽曲の分析の導入（エレクトロニカ系）
第10回	上記楽器法からの作曲技法の導入（芸術音楽作曲系）、DAWを使用した楽曲の分析の基礎（エレクトロニカ系）
第11回	卒業作品のテーマに基づいて、楽器法の基本（芸術音楽作曲系）、DAWを使用した楽曲の分析の応用（エレクトロニカ系）
第12回	上記楽器法からの作曲技法の基本（芸術音楽作曲系）、DAWを使用した楽曲制作の基礎（エレクトロニカ系）
第13回	卒業作品のテーマに基づいて、楽器法の実践（芸術音楽作曲系）、DAWを使用した楽曲制作の応用（エレクトロニカ系）
第14回	上記楽器法からの作曲技法の実践（芸術音楽作曲系）、DAWを使用した楽曲制作の実践（エレクトロニカ系）
第15回	前期の振り返り・まとめ
第16回	卒業作品のテーマに基づいた楽曲（芸術音楽作曲系）、コンピュータ音楽（エレクトロニカ系）の分析についての導入
第17回	卒業作品のテーマに基づいた楽曲（芸術音楽作曲系）、コンピュータ音楽（エレクトロニカ系）の分析についての基礎
第18回	卒業作品のテーマに基づいた楽曲（芸術音楽作曲系）、コンピュータ音楽（エレクトロニカ系）の分析についての応用
第19回	卒業作品のテーマに基づいた楽曲（芸術音楽作曲系）、コンピュータ音楽の楽曲制作（エレクトロニカ系）のについての導入
第20回	卒業作品のテーマに基づいた楽曲（芸術音楽作曲系）、コンピュータ音楽の楽曲制作（エレクトロニカ系）のについての応用
第21回	卒業作品のテーマに基づいた楽曲（芸術音楽作曲系）、コンピュータ音楽の楽曲制作（エレクトロニカ系）のについての実践
第22回	１回～６回までの総括
第23回	卒業作品の創作（コンセプトとテーマ）
第24回	卒業作品の創作（構想）
第25回	卒業作品の創作（モチーフ）
第26回	卒業作品の創作（構造）
第27回	卒業作品の創作（全体のスケッチ）
第28回	卒業作品の創作（全体のまとめ）
第29回	卒業作品の創作（仕上げ）
第30回	年間の振り返り・まとめ

履修上の注意

作曲の実習はレッスン内だけではなく、予習・復習を含めて日常的に取り組むこと

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

準備学修として予習・復習は毎週のレッスン時に指示されるので、必ず与えられた課題を実習してから臨むこと。取り組んだ課題のフィードバックは各レッスン回で行う。

教科書・参考書

適宜資料を配付する

科目名－クラス名

作曲Ⅱ①

曜日時限

実技

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	1～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	100	0	0	100

教育到達目標と概要

クラシック、ポピュラーなど様々なジャンルの楽曲について知識を高め、それらの作曲・アレンジの技術の修得。加えて作曲理論や形式の理解をベースとして、演奏の主科実技の音楽表現に活かすための作曲・アレンジの知識を修得する。専門的能力として基礎力、技術力、専門知識を得て、学士力として汎用的能力、創造的思考力を養うことを目標とする。

学修成果

作曲面では、モチーフからメロディを作曲できるようになる。メロディに適切なハーモニーをつけることができるようになる。ピアノ曲、二重奏までの楽曲の作曲ができるようになる。理論面では、主科実技で演奏している楽曲に対して、作曲の視点から基本的なアナリーゼができるようになる。作曲に必要な理論と方法について理解を深めることができる。基本の楽式について理解できるようになる。アレンジ面では、詩とメロディとの関係が理解できるようになる。室内楽の楽器法について理解できるようになる。

授業展開と内容

第1回　作曲・アレンジについての概要

第2回　作曲・アレンジに必要な知識

第3回　モチーフとその役割について

第4回　メロディの組み立てとモチーフの展開

第5回　メロディーとハーモニー、コードの関係、伴奏の働きとその作り方

第6回　クラシックに学ぶハーモニーの作り方 - 古典派、ロマン派の音楽を例に

第7回　ポピュラーに学ぶハーモニーの作り方、コードネームの理解 - 洋楽、J-POPを例に

第8回　様々なハーモニーについて

第9回　リズムの原理

第10回　形式の種類

第11回　形式に沿った楽曲の組み立て方

第12回　ベーシックな形式の理解と作曲の実践（１部形式）

第13回　発展させた形式の理解と作曲の実践（２部形式）

第14回　さらに発展させた形式の理解と作曲の実践（３部形式）

第15回　前期のまとめ

第16回　転調の理解

第17回　転調を含む３部形式の作曲の実践

第18回　複合３部形式の理解

第19回　複合３部形式の作曲の実践

第20回　様々な形式の理解と分析

第21回　作曲・アレンジの実践（導入編） - ピアノ曲のスタイル

第22回　作曲・アレンジの実践（導入編） - ピアノ曲の創作

第23回　作曲・アレンジの実践（導入編） - 二重奏曲のスタイル

第24回　作曲・アレンジの実践（導入編） - 二重奏曲の創作

第25回　作曲・アレンジの実践（導入編） - 歌曲、ソングライティング（詩とメロディの関係）について。

第26回　年度末作品制作 - 曲の構想を考える

第27回　年度末作品制作 - 楽曲のスケッチ

第28回　年度末作品制作 - 楽曲の展開

第29回　年度末作品制作 - 仕上げ

第30回　まとめ

履修上の注意

課題および作曲はレッスン内だけでなく、予習・復習を含め日常的に取り組み、担当教員の指示に従うこと。レッスンでは、毎回、練習課題の実施を伴う。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

準備学修として予習・復習は毎週のレッスン時に指示されるので、必ず与えられた課題を実習してから臨むこと。取り組んだ課題のフィードバックは各レッスン回で行う。

教科書・参考書

必要に応じて指示をその都度与える。

科目名－クラス名

作曲Ⅱ③

曜日時限

実技

担当教員

豊住　竜志

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	3～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	100	0	0	100

教育到達目標と概要

この授業は作曲を学ぶための科目であり、グループの形態で行われる実技レッスンである。作曲Ⅱ②に引き続き、クラシック、ポピュラーなど様々なジャンルの楽曲について知識を高め、それらの作曲・アレンジの技術の修得。加えて作曲理論や形式の理解をベースとして、演奏の主科実技の音楽表現に活かすための作曲・アレンジの知識を修得するとともに、必要に応じてDTMについて学修する機会を設ける。専門的能力として基礎力、技術力、専門知識を得て、学士力として汎用的能力、創造的思考力を養うことを目標とする。

学修成果

作品分析・楽器法を学ぶことを通じて様々な作曲技法を理解し、多様なジャンル・編成の作曲ができるようになる。

授業展開と内容

第1回　楽曲分析と作曲技法（序論）

第2回　楽曲分析と作曲技法（導入）

第3回　楽曲分析と作曲技法（基本）

第4回　楽曲分析と作曲技法（応用）

第5回　楽曲分析と作曲技法（実践）

第6回　楽曲分析と作曲技法（レベルアップした実践）

第7回　楽曲分析と作曲技法（総合演習）

第8回　楽曲分析と作曲技法（レベルアップした総合演習）

第9回　楽器法と作曲技法（序論）

第10回　楽器法と作曲技法（導入）

第11回　楽器法と作曲技法（基本）

第12回　楽器法と作曲技法（応用）

第13回　楽器法と作曲技法（実践）

第14回　楽器法と作曲技法（レベルアップした実践）

第15回　楽器法と作曲技法（総括）

第16回　室内楽について　導入

第17回　室内楽について　発展

第18回　年度末提出作品の創作（曲の構想）導入

第19回　年度末提出作品の創作（曲の構想）発展

第20回　年度末提出作品の創作（モチーフ）導入

第21回　年度末提出作品の創作（モチーフ）発展

第22回　年度末提出作品の創作（構造）導入

第23回　年度末提出作品の創作（構造）発展

第24回　年度末提出作品の創作（全体のスケッチ）導入

第25回　年度末提出作品の創作（全体のスケッチ）発展

第26回　年度末提出作品の創作（全体のまとめ）導入

第27回　年度末提出作品の創作（全体のまとめ）発展

第28回　年度末提出作品の創作（仕上げ）

第29回　年度末提出作品の創作（総括）導入

第30回　年度末提出作品の創作（総括）発展

履修上の注意

作曲の実習はレッスン内だけでなく、予習・復習を含め日常的に取り組み、担当教員の指示に従うこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

準備学修として予習・復習は毎週のレッスン時に指示されるので、必ず与えられた課題を実習してから臨むこと。取り組んだ課題のフィードバックは各レッスン回で行う。

教科書・参考書

必要に応じて指示をその都度与える。

2022年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：0274　教員名：豊住　竜志

１）評価結果に対する所見

【実技レッスンについて】
主科の作曲・エレクトロニクス実技および副科の作曲Ⅱを担当した。Q5,9,10 の満足度に関する設問を中心にすべての設問に対して「そう思う」の回答であり、全般的に評価結果は良好であると思われる。また、各学生が取り組んだ後期末提出作品も完成度の高い作品が多く、成果があったと考えられる。
【クラス授業について】
理論系の科目である「ハーモニー演習、ポリフォニー演習、対位法、ミュージックセオリー（上級)」、各種ソルフェージュ科目とも、満足度に関する Q5,9,10 などの設問を中心に「そう思う」の回答が多く寄せられ、昨年度と比較しても全般的に結果が良好であると思われる。

２）要望への対応・改善方策

【実技レッスンについて】
昨年度と同じく良好な結果が得られたと思われる。自由記述欄に「今まで学んできた和声法や対位法を実際の楽曲に活かす方法を学ぶことができた」などの意見が寄せられた。
今後も学生の興味・関心・個性を尊重しながら、高い作曲技術と発想豊かな創作力を身につけることができるように指導していきたいと考えている。
【クラス授業について】
１昨年より取り組み完成した「聴音・視唱ソルフェージュ②の自習用課題」「ハーモニー演習②・ポリフォニー演習の補助資料集」を活用した授業運用を実施したことが、良好な結果に結びついたと考えられるため、今後も追加資料などを作成しながら、より理解しやすい授業を心がけていきたいと考えている。全体的に Q8 の学生自身の予習／復習に関する回答が「少し思う」がやや多い科目があるため、より意欲的に学修できるように指導を行っていきたいと考えている。

３）今後の課題

上記で述べた教科書以外の「授業補助資料集」の作成／運用によって一定の成果が見られたと思われるため、今後の課題はそれらを用いたより理解しやすい指導方法の実践に取り組んで行きたい。また、今後必要に応じてその他の科目に関するテキストの作成にも取り組んで行きたいと考えている。実技／授業科目とも興味を持って自主的に学ぶ姿勢が持てるような指導法の研究をより深めることが今後の課題であると思われる。

以　上